

天竜川の災害伝説

笹本 正治

目次

はじめに	3
第一章 洪水の伝説と実態	4
第二章 蛇 抜 け	16
第三章 竜と釣鐘と雨・水	19
第四章 竜がもたらす洪水	27
第五章 水害への対処	36
「水神を祭る」	36
「経 塚」	41
「堤防の上の木」	43
「開発と水害対処」	45
「洪水になった時に」	47
おわりに	50

はじめに

天竜川は、ほとんど連年といってもいいほど洪水などの水害を流域にもたらしました。伊那谷の歴史は、そうした水害の歴史といっても過言ではないのです。その具体的な模様については本シリーズで別に『天竜川の災害年表』をまとめましたので、それを参照してください。

水害が頻発する地域では、そうした災害を伝えることによって、被害を最小限に食い止めようと再び来る災害に備えたはずです。災害を後の世に伝えていく手段として、災害碑や伝説などもあったと思います。もしそうだとすると水害に関係する伝説のなかには、後世の人々に対するメッセージが含まれている可能性があります。災害がどのような特徴ある文化を地域に生み出したかは、今後考えていかなくてはならない大きな問題なのです。そして、そこに「語りつくす天竜川」という本シリーズの大きな意義の一端もあると私は考えるのです。

さて、現在の私達は水害が引き起こされると、気象条件や、被害箇所状況など、いわゆる科学的な視点に立って

その原因を考え、それに対処しようとしています。しかしながら近代以前の人々にとっては、災害がどうして起こるかといった原因論は、当然のことですが二〇世紀に住む私達とは異なった観点から考えられていたと推察されます。災害の原因意識が私達と異なっていたのなら、水害に対処する方法も私達とは違っていたはずですが、この点を是非とも明らかにしたいものです。そうすれば日本人の心性史の一端が見えてくるかもしれません。過去の人々がどのような災害感を持っていたかは、日本人の自然観とも関わることです。災害の伝説のなかには、そうした問題も含まれているでしょう。

こうした問題意識から、本書では天竜川を中心とする災害の伝説を取り上げ、その背後にある日本人の意識を探っていくことにしました。なお、このための素材は天竜川のみでは無理ですので、その源の諏訪湖、天竜川の支流にも求めます。同時にこれまでと同様に、天竜川の下流、静岡県側には触れることができませんが、この点もご了解ください。

第一章 洪水の伝説と実態

天竜川は頻繁に災害に見舞われました。それがいかに頻繁であったかは、「はじめに」でも述べましたが、本シリーズの『天竜川の災害年表』を参照してください。この災害の悲惨さを伝え、あるいは再び来る災害に備えるために、天竜川の流域には多くの伝説が語り伝えられてきました。

そこで最初に、天竜川の災害の伝説にはどのようなものがあるか確認しておきたいと思います。順序としては、年代が示されている災害の伝説を年代の古い順に並べ、最後に年号の入っていないものを見ることにします。以下の伝説を具体的に知るためには、『天竜川の災害年表』を横に置いていただいたほうが、本章は理解し易いと思います。なお、最初に伝えられている伝説そのものを記し、それに対しての若干のコメントを加えました。

(一) 大蛇が天竜川を流れて行った話（飯田市下久堅）

今から七百年も前の元仁二年（一二二五）六月二日はひどい大雨であったといえます。天竜川の水もひどく濁

流がうずまき、何だかえたいの知れないものも沢山流れて村人を驚かせました。二丈（五、六メートル）もある大蛇も流れて行ったそうです。―（『下久堅村誌』八〇四頁・下久堅村誌刊行会・一九七三）

元仁二年の洪水については、その実態などを史料的に確認することはできません。ともかく一二二五年という、これからみていく洪水と比較すると、飛び抜けて古い年号の洪水が記憶されていることは注目すべきだと思います。

特に目を引くのは五、六メートルもある大蛇が、洪水の濁流とともに流れていったという内容です。これは洪水と竜とが深い関係にあり、洪水などが大蛇＝竜によってもたらされるという理解を示しているのではないのでしょうか。

(二) 四百年前の南原橋（飯田市下久堅）

文永寺の鐘の伝説でよく知られた黒瀬が淵の上には四百数十年前に橋がかかっていました。当時はもちろん天竜川には一つも橋がない頃のことでした。

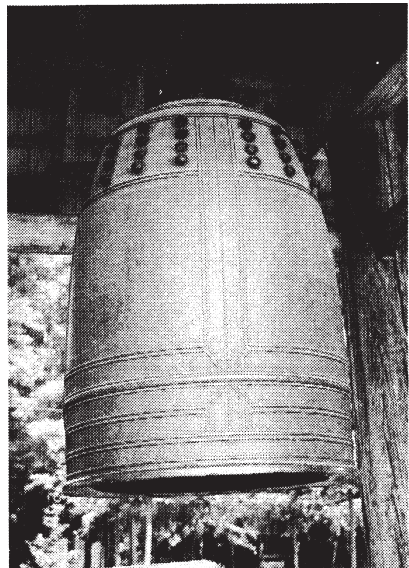
天文十三年（一五四四）というときまだ信玄が神の峯をせめおとす十年も前のことでしたが、その年は日本国中ひどい雨降が続いて、京都なども街の中を舟で歩いたといわれる大洪水があったということです。この洪水で南

原橋も遂におちてしまいました。その後ずっと橋がなく、明治二年になって、矢張り黒瀬が淵の上に、赤須の山から持ってきた松の大木でつくるまで橋はありませんでした。―（『下久堅村誌』八〇九頁・下久堅村誌刊行会・一九七三）

ここでは天文一三年の洪水が問題になっています。この年の七月九日、京都は大洪水に見舞われました。『嚴助往年記』には「大洪水、京中人馬数多流失、在家町々釘抜門戸悉流失、四條五條橋・祇園社鳥居流失、禁中西方築地破損」（『改訂史籍集覧』第二五冊三七九頁・近藤瓶城編輯・一九〇二）とあります。洪水は全国的に起こったようで、

この地方でも大鹿村で大洪水があり、横山七か寺、御堂島薬師が流されたことが知られます（『大鹿村誌』中巻七九五頁・大鹿村誌刊行委員会・一九八四）。その洪水は天竜川をも襲い、黒瀬が淵の上に架けられていた南原橋をも押し流したのです。

ちなみに伝説の上では最初にこの場所に橋が架けられたのは建長二年（一二五〇）であるといわれています（『下久堅村誌』八一七頁・下久堅村誌刊行会・一九七三）。しかしながら、延徳元年（一四八九）には橋供養が行われていますので、仮に建長二年に橋が架けられていたとしても、



黒瀬ヶ淵から出たと伝えられる文永寺の鐘

この時までには流されていたことになります。しかも、天文二年（一五三三）に京都からやって来た嚴助は船で天竜川を渡って、南原の文永寺に入っています。延徳元年の橋もこの時までに流されてしまったのです（笹本正治『戦国時代の天龍川』一二頁・建設省中部地方建設局天竜川上流工事事務所・一九八一）。天文一三年に南原の橋が流されたのが事実なら、天文二年から一三年の間に再建されていたことになります。この点ははっきりしませんが、ともかく、この年に洪水があったことは事実で、この伝説はその模様的一端を伝えているといえます。

黒瀬が淵が文永寺にとって特殊な場所として意識されていたことは、ここから文永寺の梵鐘が出たなどという伝説があることでも明らかです（笹本正治『天竜川の淵伝説―熊谷家伝記』を中心に―）三〇頁・建設省中部地方建設局天竜川工事事務所・一九九一）。

（三） 般若島（伊那市 下新田）

本村の坤に当る。下新田の南方、三峰川の下流に至り、礫鏝たる河原に、般若島と称する平地あり。往古より洪水ありと雖も、今に此の地の流失したるを見ず。斯の所以を原るに、今を去る事二百五十余年前、寛永元年（一六二四）慶芳院不源と言ふ者あり、大峯山行者にして斯の地に堂宇を構へたり。然るに正保四年（一六四七）五月大洪水の時節、將に流れんとするに当り、般若経を転読して、其を免るる事を得たり。故を以て般若島と名づくと言ふ。―（『長野県町村誌』三四六三頁・長野県町村誌刊行会・一九三六、郷土出版復刻・一九八五）
ここでは正保四年の洪水が語られています。しかしながら、この洪水の実態については知られていません。伝説は、伊那市下新田の河原に般若島という平地がある。昔から洪水があってもこの場所は流失したことがない。その由来を

追ってみると、今を去る二五〇余年前、寛永元年に慶芳院不源という大峰行者がこの地に堂宇を構えた。しかし正保四年五月の洪水のときに、もう少しで流されようとした。そこで彼は般若経を転読して、お経の力で難を逃れたので般若島という内容です。

なお、伝説の主体は般若経によって洪水を免れたところにありますので、この点については第五章の「水害への対処」で改めて触れ直すことに致します。

（四） 天竜川の堤防と騒動（飯田市下久堅）

下久堅は天竜ばたの村のことですから、随分と古くから天竜川との関係は深くありました。寛永の大水ではひどい被害をうけ、数十町歩の田地が流され、川原にあった家二軒も流されていってしまいました。このような大水も度々出ましたので堤防も何回となくつくりました。

寛文年間（一六六一―七三）というとき、まだ飯田に堀様もこない前で、脇坂という殿様がいました。まだ古いしきたりが残っていて村の中は殿様の家来にわけ与えられました。

知久平の彦右衛門さんの田地の年貢は殿様の家来塩山次右衛門へおさめることになっていましたので次右衛門

は彦右衛門さんにいつけて川除水刳普請をさせたことがありました。堤防工事をするのは大変いいことでしたが、彦右衛門のやり方は、小百姓にばかり不公平なことをするので大騒動がおきたことがあります。――『下

久堅村誌』八〇四頁・下久堅村誌刊行会・一九七三）

ここで関係しているのは寛永の大水です。寛永年中には寛永元年（一六二四）と寛永四年（一六二七）に大きな洪水が起きています。可能性としては前者のほうが大きいのではないでしょう。

（五） 大田切川の川除林（駒ヶ根市）

元禄四年（一六九一）、大田切川の天竜合流点へ二十数歩にわたり植林した。長さ七百間、幅百間は戦後まで残存したが、現在伐木、開墾されて水田地帯に変わり、県立西駒郷ほかの施設中に僅かに残る松林にその面影を留めている。――『歴史の道調査報告書 天竜川』五五頁・

長野県教育委員会・一九九〇）

元禄四年の五月に霖雨があり、六月にいたって天竜川に洪水がありました。さらに八月六日にも洪水があり、伊那谷に大きな被害がありました。ですから、この植林はこの年の水害の復旧工事の一環としてなされたものと考えられ

ます。多くの木を植えて根を張らせ、堤防を丈夫にしようとしたのでしょう。

（六） 正徳の満水（飯田市下久堅）

今では満水などという言葉は余りつかいません、洪水のことなのです。天竜川は三年に一回の割で江戸時代にも洪水がありました。中でも一番大きかったのは未満水（正徳の洪水）でした。正徳五年（一七一五）は旧五月から大雨が降って、六月十八日の水は殊にひどい満水で、北原の裏の洞なども一晩でぬけてできたといえます。天竜川の流水が随分多かったので、川ばたの虎岩知久平で流木ひろいに行った人達も多く、遂に虎岩の五右衛門さんや知久平の助次郎さんは流されて行方も知れなくなりました。――『下久堅村誌』八〇四頁・下久堅村誌刊行会・一九七三）

近世に天竜川を襲った幾多の洪水の中でもっとも有名、かつ被害が大きかったのが正徳五年（一七一五）の六月一七日から二四日にかけての大洪水で、一般に「未の満水」と呼ばれます。この洪水は天竜川の流路を変えてしまうほど大規模で、その被害は甚大でした。それだけにこの洪水にまつわる伝説は以下にも見るように、いくつか伝わって

います。

この伝説は、北原の洞（谷、溪谷）が一晩でできたというのを伝えています。洪水は多くの流木を下流にもたらししました。それを拾いに行つて、天竜川に飲み込まれる人もあったようで、伝説はそこに主体を置き、虎岩の五右衛門さんや知久平の助二郎さんが流された、具体的に人名までを伝えています。未満水そのものからは助かりながら、流木を拾いに行つて濁流に飲み込まれたという伝説は、災害そのものより、より生々しくこの時の災害の実態を伝えているとも言えます。

（七）市田の出砂原（下伊那郡高森町）

惣兵衛堤防で知られた市田村の出砂^だ原は、正徳五年のひつじ満水の時、この村の大島山から天竜川に注いでいる大島川が満水となつて出来た出砂原であると云う。そうして市田駅前の山三魚店うら庭にある直径二間に九尺ほどあるかと思われる大石は、そのとき大島川の上流から流れて来たものだと言ふ。

なお市田駅近くの月照庵入口に、高さ六尺位の自然石に、「前亡後死三界万霊」正徳五年乙未六月十八日云々、松岡了溪叟建と云う石碑が建てられている。この石碑は

碑面にもあるように、正徳五年のひつじ満水の時、流死した人の供養のため、この村の古刹安養寺二世了溪（市田村羽生勝郎氏先代で享保五年六月二日没）が主唱となつて建てたもので安養寺の過去帳によると、「正徳五年六月十八日洪水、田島前沢より下は松川の間の田畑大損害人馬流死するもの多し」と記されている。――（村沢武夫編『伊那谷の災害と凶作』一二三頁・伊那郷土史刊行会・一九六三）

この伝説も未満水の状況を具体的に伝えています。市田の出砂原はこの時に土砂が押し出してできたものだというのです。また、直径が約六メートルほどもある大石もこの時に流されてきたと伝えられています。

さらに市田駅近くの月照庵の、未満水のために死亡した人達の供養碑についても語られています。多くの流死した人のための供養碑が、天竜川沿いに建てられたものと思われませんが、そうした研究を今後続ける必要があるでしょう。

（八）子泣き石（下伊那郡上郷町）

上郷村字天王原の田の畔に子泣き石がある。その石が昔は悲しい声で泣いたと云ふ。正徳五年（一七一五）六月の大洪水で飯田の城下は泥海のやうになった。未満水



上郷町の子泣き石

と称んだのがそれであった。その時山から崩れて来た大石が、此処で可哀そうに小児を一人押し殺した。それから後、毎夜毎夜、この石の下で小児の泣き声が聞えるやうになった。悲しそうなその泣き声を憐れんで、村の人たちが供養のためにその石の上にお地藏様を建て、やっ
てから、小児の泣き声は聞えないようになったそうである。――(岩崎清美『伊那の伝説』二〇四頁・歴史図書社復刻・一九七九)

未満水の伝説のなかでもっとも有名なものが、この子泣き石の話です。子泣き石の現地へ行ってみると、巨大な石の上に石地藏が立っています。これだけ巨大な石が崩れ流されてきたところに、この時の災害がいかにすさまじいものであったかが分かります。そしてこの石こそ、この時の洪水を伝えていく目に見える記念碑であり、伝説が存在することによって、この石が未満水で運ばれたものだということが伝えられているのです。

(九) 鍛冶ヶ島流失 (伊那市)

鍛冶ヶ島というのは下牧(伊那市)護災堤防(藤沢川砂採集プラントのあるところ)と国道一五三号線の間にあった島のことで、古くから鍛冶職人が住んでいたが、

享保十一年（一七二六）の大洪水で高一四四二石の田と一四戸の家全部が流失し、表木村へ移住したという記録が残っている。慶応四年には田原新田でも同じようなことがあったという。―『歴史の道調査報告書 天竜川』

四〇頁・長野県教育委員会・一九九〇）

この伝説は享保十一年（一七二六）の洪水の模様を伝えています。伊那市の下牧に享保十一年以前には鍛冶ヶ島と呼ばれる島があり、鍛冶職人が住んでいたのですが、この洪水で水田および家の全てが流失し、住人は表木村（伊那市西春近）に移住したということです。

ちなみのこの鍛冶ヶ島は、はじめは天竜川を挟んで表木村とは対岸の殿島村の分でしたが、その後の天竜川の流路の移動により、元禄三年（一六九〇）の検地帳では表木村の所属となった（『長野県の地名』四二二頁・平凡社・一九七九）といわれます。殿島の大西家文書には、「鍛冶ヶ島新田家居迄のこらず流れ尽くし、立つ所もこれなき体、本村へ上り所どころの野つれ、または諏訪形原の街道筋へ小屋がけいたし、田地これ無き者ども少々の売り家等を致し一日を送り候仕合に候て、本村ともに困窮」（『伊那市史』歴史編一一四五頁・伊那市史刊行会・一九八四）と記されています。

ともかくこの時の洪水は、一村を流失させるほどのすごかったのです。

（一〇） 見通しの桜（伊那市伊那郡）

狐島の天竜川沿い地帯は度重なる洪水で流され、その都度対岸の荒井・西町との境界紛争が絶えなかった。その時、いつも基準になったのが延享元年（一七四四）の出水時に決めた約定書と絵図面であった。その絵図面に載っている原拠点の一つが長右衛門家の社木の桜で、他の原拠点を示すものが次々となくなった中で一つだけ残された。現在は古木の根本から若樹が育ち、標柱が立てられている。―（『歴史の道調査報告書 天竜川』四六頁・長野県教育委員会・一九九〇）

この話では延享元年の出水が元になっています。しかしこれは、それほどひどい洪水ではなかったようで、被害などは伝わっていません。

洪水は田畑を流し、村の場所を狭くすることも、逆に新たに附洲ができて、村の範囲を広げることもあります。さらに村境の目印を無くすることさえあります。この伝説はそうしたときの村の境の基準になるのは何かということにつながると言えます。

(一一) 阪本天山の墾田の碑 (駒ヶ根市東伊那)

東伊那大久保さがり松、塩田川の河口に、この地の治水開拓功労者中村新六の河水を治め数町歩の美田を開いた功を賞揚して墾田の一角にある巨石に碑文を彫ったもの。「大窪邨中邨氏墾田碣記天山真逸源俊豈撰」とあり、土地の人は墾田の碑といっている。寛政元年(一七八九)天竜川の大氾濫により、この辺一帯は岩石累々たる荒地と化した。中村は天山につき実字を修め、天明の飢饉に発奮、この工事に当り隧道を穿ち堤防を築き、大業を成し遂げたものである。碑は花崗岩で現在風化が進み文字の判読はできない。―(『歴史の道調査報告書 天竜川』五五頁・長野県教育委員会・一九九〇)

寛政元年(一七八九)六月一七日より降り出した大雨は、翌日を中心に天竜川に大変な洪水をもたらしました。特に高遠領では大きな被害を受けました。ここでは、有名な阪本天山の墾田の碑が、この時の洪水と関わって説明されています。

(一二) 鬬龍

文化五年七月二十五日、雷雨すさまじく暴風吹起り、

山林動揺して、黒雲地にしき、霆電四方にひしめき、木をぬき、枝を割、石をとはず、故に民家戸を閉て、開くことあたはず、只今天傾き地陥かと、おそろしなといふはかりなし、翌日、風雨晴わたりて其辺をみるに、此烈風の過る所樹木みな折れ倒れたることおひたゞし、こゝに吉田村の百姓与市といへるもの龍の皮を拾ひ得たり、腹の皮と見へて、六寸四方ばかり、青白の光ありて、石決明の如し、其頃遠近伝へて見るもの日々に市の如し、又其頃山吹村の者落葉搔に行て、是も同じく五寸ばかりの皮を拾ひたり、其辺の医家又好事のもの少許つゞ分得て、所々に珍藏す。按に是鬬龍のわざなるへし、古より鬬龍の説あり、感通伝に曰、貞観十三年龍大に鬬ふ、雷霆震撃水火交飛やゝ久して乃静まる塔廟もとの如し、人皆龍の毛を拾ひ得たり、長さ三尺許、其色黄赤也云々、又北越にて寛政三年八月朔日信川の西江戸巻の傍なる池水より起りて、鬬龍の事ありと云。―(天保五年に井出道貞の著『信濃奇区一覽』巻之四、『路原拾葉』第一八輯・名著出版社版・下巻四三二頁)

これは天保五年(一八三四)に書かれた『信濃奇区一覽』という本に出ている話です。念のために訳しておきましょ

文化五年（一八〇八）七月二五日に、雷雨がすさまじく、大風が吹き起こって、黒雲が地面を這い、雷光が四方にひしめいて、木を抜き、枝を割り、石を跳ね飛ばした。このために家々は窓を閉めて、開けることができなかった。ただひたすら天が傾いて、大地が陥没するかもしれないと、恐ろしさはいうばかりもなかった。翌日この暴風が晴れ渡ったので、その辺を見てみると、この激しい風の過ぎ去った場所の樹木はみな折れて、倒れるものがおびただしかった。そうした中で吉田村（下伊那郡高森町吉田）の百姓の与市という者が竜の皮を拾った。その皮は腹の部分だと見えて、六寸（約一八センチ）ばかりの大きさで、青白い光りがさして、あわびに似ていた。その頃はこの話を伝え聞いて、見にやって来る者が多くて、毎日市がたったようだった。またその頃、山吹村（高森町山吹）の者が落葉かきにいって、これも同じく五寸（約一五センチ）ぐらいの竜の皮を拾った。その辺の医者や好事家はそれを少しばかりずつ分けてもらって、今でも所どころに珍藏している。

私が思うのに、この時の雷雨や暴風雨は鬩竜の仕業であらう。昔から鬩竜については色々なことが言われている。貞観一三年（八七二）に竜が大いに戦った。いなびかりや振動などがあり、火と水とが交わって飛び、やや時間がたっ

てから静まると、仏舍利を納めてある塔が元のごとくなくなった。この時人々はみな竜の毛を拾った。その毛の長さは三尺（約九〇センチ）ばかりで、その色は黄赤だったということである。また北越（越後・新潟県）では寛政三年（一七九一）八月一日に信川（信濃川か）の西の江戸巻のかたわらの池から鬩竜が起きたということがあった。―文化五年七月二五日に、天竜川は大雨に見舞われ洪水になっていました（村沢吟治郎『赤須・上穂旧記鈔』二三一頁・上伊那史談会・一九三九）。ですから井出道貞の記載はある程度事実なのです。常識からして、鬩竜の皮を拾ったということはありえないと思います。しかし、ここで思い起こしていただきたいのは（一）の伝説です。あの伝説では洪水と大蛇（竜）とが関係のありそうなのが語られています。また、この記載では明らかに雷雨・暴風を起こすものとして竜が考えられています。一九世紀の人々でも、竜が風や雨を呼ぶのだと本気で信じる向きがあったのです。

（二） 移住した田原村新田の人々（伊那市）

慶応四年の洪水、大沢川の押し出す大水と天竜川の増水が重なって、田原村新田の全戸に満水し、家屋二戸、水田二〇町歩余が流失したという。この時避難した人々

のうち一一〇戸が今でも薬師庵の裏山に住んでいる。この部落を山組と称して石垣づくりの住宅を構えている。――『伊那市史』歴史編一一四六頁・伊那市史刊行会・一九八四

これは(九)に触れられていた話です。慶応四年(明治元年・一八六八、改元は九月八日)五月七日から洪水があり、上伊那地方には大きな被害がありました。世に辰満水といわれるものです。これはその時の事実を記したものです。現在の伊那市にあたる田原村新田(先に触れた下牧区)の天竜川を挟んだ反対に当たる)は家屋二一戸、水田二〇町歩が流失したために、その住民の一部の子孫は今でも薬師庵の裏山に住んでいるのです。洪水にあった人々には行く場所を失い、災害の被害がない高台に上り、そこで子孫を増やして一一〇戸にもなったわけです。当然ここには慶応四年の洪水の記憶が深く刻まれています。

(一四) 西向庵の十一面観音像 (上伊那郡高遠町)

慶応四年五月一七日の洪水で、西向庵のお堂が激流に吞まれる寸前、村人二・三人が身体の腰縄を大きな柏の木にしぼりつけ決死の覚悟でぐらいついている堂内に飛び込み本尊の十一面観音と、釣鐘を運び出した――(『高遠

町誌』上巻歴史二一五四頁)

この年、天竜川は五月一八日に大満水になっています(村沢武夫編『伊那谷の災害と凶作』一〇六頁・伊那郷土史刊行会・一九六三)ので、一七日に高遠で洪水があったことは間違いないでしょう。この時の洪水で西向庵のお堂が激流に飲み込まれる寸前に、決死の覚悟で堂内の十一面観音と釣鐘を運び出したということです。これも歴史的事実でしょう。

これまでの伝説などは、話の中に年代が示されていません。そしてそれぞれが洪水ということでは、ほぼ間違いない事実を伝えていると思います。ところが以下の伝説は、そうした時代性は明示されていません。しかしながら、洪水に対する昔の人々の意識を伝えてくれると思います。

(一五) 草餅地藏 (上伊那郡伊那市美篁青島)

三峰川のはんらんでできた微段丘の上にある。いつのころか、三峰川の大満水るとき奥の方の村から石地藏が流れて来た。水がひけてから村人がみつけ、この地にまつたという。願いごとがかなうと年の数だけ団子をあ

げる。四月二十四日が縁日で、村の人達は草餅をあげる。

以前は花柳界の女性の参けいがあった。――『長野県史』

民俗編・第二卷（三） 六〇六頁・長野県史刊行会・一九

八九）

三峰川の大満水のと、奥の方の村から石地藏が流れてきたという伝説です。この地藏さんは御利益があったようです。逆に言うとも利益の多い地藏さんは、この世から出現したのではなく、水害とともにやって来たものなのです。日本各地の霊験あらたかな仏像が洪水のあとに発見されたとか、池や井戸の中、地中から出現したという伝説をもちます。水中や地中は私達の住む世界とは別の世界、他界です。この石の地藏さんも洪水とともに他界からやって来たのだというようにも解釈できるでしょう。その意味で洪水は、他界と我々の世界を結び付けるような意義があるという理解もあったのです。洪水によって上流から肥沃な土がもたらされ、これによって農業が豊かにできるという面をも洪水は持ちます。また洪水で全てが流されてしまえば、豊かな者も貧しい者も、みんな同じ様にゼロから再出発しなければなりません。ある意味では世直しです。こうしたことは神々が我々人間に与えた条件だとも考えられたのでしょう。

（二六） 無縁仏（上伊那郡宮田村）

大田切川の岸边に俗に無縁仏と呼ばれる石仏群がある。昔からこの川の洪水によって死んだ旅人は少なくない。

それらの霊を供養した石仏と伝えられている。――『歴史の道調査報告書Ⅶ―伊那街道（三州街道）―』二七頁・長野県教育委員会・一九八一）

これは岸边にある俗に無縁仏と呼ばれる石仏群が、大田切川の洪水によって死んだ旅人のものだといえられていることを示します。多くの旅人までが洪水に巻き込まれるくらい、この川の洪水は頻繁に起こったものでしょう。

（二七） 石神松（上伊那郡中川村）

石神は農の神、左宮司であるらしい。また伝説によると往古、天竜川の深淵でちょうどこの下にある釜淵（正しくは含満の淵といって本来は仏道修業の場であり、ほかにもこの名称の淵が諸所にある）に大きな鯉がすんでいた。世人はこれを天竜の主、九頭竜（大蛇とも）の化身と言っていたが或る年の洪水に、淵の外に跳りでて渴いて死んでしまったから、里人が死骸を今の石神の地に厚く塚を築いて水神として祀ったとも言う。ちょうど

それは、陣馬形山にある人が登って天竜川を眺めたところ、蜿蜒として遠州の方へ流れていく川のようにすが、竜が天へ向ってのぼっていくのに似ているので、昔は天流川と書いていたのをそれから天竜川と書くようになったとも伝えていくのに似ている。

またある老嫗は「この石神を息をしなくて七廻りする」と青坊主が現われてくるのが見えるそうな」とも言っている。

また元和の頃、常泉寺に一人の山伏が寄寓していたが、その法力が頗る顕著であった。その頃しきりに天竜川が氾濫して、これに悩んだ農民は、この行者に頼って水難除の祈禱してもらった。行者は熱心に経を誦し二十一日間祈願を続けたが、満願の日に精魂尽きてついにたおれた。彼は死に先立ちこの水神に手植えの松を手向けたが、これが即ち今の石神の松だとも伝えられている。だとすると樹齢は三五〇年内外になるわけである。――

『南向村誌』七〇〇頁・中川東公民館・一九六六

天竜川の深淵の一つに大きな鯉が住んでいた。世の人はこれを天竜川の主、九頭竜（大蛇とも）の化身と言っていた。この鯉がある年の洪水で、淵の外に躍り出て、体が乾いて死んでしまった。そこで里人がその死骸を今の石神の

地に塚を築いて水神として祀ったというのです。

鯉が住んでいたのは深い淵ですが、淵はこの世とあの世との接点、他界の入口でした（笹本正治『天竜川の淵伝説』）。鯉が住む淵には特別な意味が込められていたのです。

中国では鯉は竜が身を変じたものだと考えられており、鯉が黄河をさかのぼって河南の竜門の滝を越えたと竜に化するとという登竜門の説も生じたといえます（沢田瑞穂「鯉」・『大百科事典』第五卷二三五頁・平凡社・一九八四）。伝説で鯉が天竜川の主、九頭竜、大蛇として意識されていることはこれとつながってきます。そしてこの鯉が洪水と結びつけられ、さらに水神として祭られていたのです。このことは（一）や（一二）の伝説ともつながってきます。恐らくこの場合にも洪水を起こしたのは鯉＝竜という認識があり、それで水神に祭られたのではないでしょう。

以上見てきたように、多くの水害が伝説となって伝えられています。そしてその背景には、洪水の事実を伝えていかなければいけないという、地域の人々の意識があったと思われる。

第二章 蛇 抜 け

第一章では、天竜川の洪水そのものにかかわる災害の伝説を見てきました。それらの伝説の内容で注目されるのは、子泣き石で代表されるように、洪水の際に大きな石が運ばれたことです。天竜川が大洪水を起こすような時には、当然のことながら大雨が降りました。この雨は周囲の山々にも降り、天竜川の支流から本流に向かって洪水が起きましたが、その多くの場合、水だけでなく土石流となりました。すなわち、伊那谷の東西には南アルプスと中央アルプスの高山が連なっていますが、そこから最も低い天竜川をめぐって周囲に降った雨が流れ込んだのです。その上、両アルプスは花崗岩質で保水性に乏しいため、水の出は急でした。それに花崗岩の風化したものは崩れやすく、土石流になりやすかったのです。こうして、天竜川が洪水に見舞われるような時には、たいてい土石流が伴いました。むしろ天竜川の支流の洪水の被害のほとんどは、土石流といってもよいぐらいなのです。天竜川の水害を考えるには、土石流災害を欠くわけにはいきません。

この土石流のことを、この地方では蛇^{じゅう}抜けと呼んでいます。本章を通じて考察するように、この名前自体に大きな意味が隠されていることは間違いないと思います。そこでこの章では天竜川の洪水とともに、その支流からもたらされた蛇抜けの伝説を、北から南へと追っていきたいと思います。

(一) 沢底の蛇の池 (長野県上伊那郡辰野町朝日沢底)

沢底の山寺に堂平という所があり、昔ここにお寺があったが、いつの頃からか廃寺になってしまった。

この堂平に蛇の池とよぶ小さいが底無しの池がある。昔、この池に大蛇が住んでいたが、大雷雨で山抜けしたとき、一緒に流れて行衛がわからなくなった。池から七、八間離れたところに蛇ヌケといって、蛇の抜け出した跡だというところがある。この池を掻きまわすと雨が降ると言って、誰も昔から手を出した者がいないという。――『長野県 上伊那誌』民俗篇上一四三一頁・上伊那誌刊行会・一九八〇)

辰野町の沢底の堂平に蛇の池と呼ぶ小さい底無しの沼があり、昔ここに大蛇が住んでいたが、大雷雨で山抜けした時、一緒に流れて行方が分からなくなった。池から七、八間はなれたところに蛇抜けといって、蛇の抜け出したあと

だという所がある、これが伝説の内容です。

伝説では大雷雨で山抜けした時、大蛇は一緒に流れ出し、しかも蛇の抜け出したあとは蛇抜けと呼ばれているといえます。これまで述べてきたことから明らかなように、この山抜けは土石流です。そしてその跡が蛇抜けなのです。この伝説ではあまり明確に出てはおりませんが、蛇が池から抜け出したので蛇抜けになったというのが、蛇抜けという名称からもわかる理解なのです。そしてこの蛇抜けをするために、大蛇は大雷雨を呼んだのです。換言するならば、この大蛇は水を司り、雷雨を呼ぶことのできる特別な能力を持っていたのです。伝説の後半部に、この池を掻き回すと雨が降るからといって、誰も昔から手を出さないといっているのは、この大蛇の持っていた水神としての能力にながるものといえます。

この話は、前章で見た天竜川の災害伝説の（一）（一二三）とも関係しています。大蛇、竜は水の神であり、水を司り、場合によると蛇抜けや洪水などを引き起こすと考えられていたわけです。

（二） 洞ヶ入鐘楼堂（上伊那郡辰野町上平出）
上平出部落の南端、地名大門を東の山の谷間に入るこ

と約二町、山の中腹が鐘楼堂のあった所である。昔、その所から山抜けをして、鐘楼堂は泥砂と共に押し流され、釣鐘は天竜川の百々の淵にころびこんで大蛇となり、淵の主となったという。――『長野県 上伊那誌』民俗篇 上一四四九頁・上伊那誌刊行会・一九九〇）

この伝説では山抜けと出てくるだけで、蛇抜けとは出てきません。しかしながら、鐘楼堂が山抜けにより泥砂とともに押し流され、釣鐘は天竜川の百々の淵に転び込んで竜になったといえます。明らかに竜と洪水との関係が読み取れます。（一）の伝説がある辰野町ということをも加味すれば、この伝説も蛇抜けを下敷きにしているということができでしょう。

淵に鐘があるのは先に見た第一章（二）の伝説ともつながります。さらに竜と鐘とが深い関係にあり、鐘が雨乞などに使われる事例は広く全国に見られます（笹本正治『中世の音・近世の音―鐘の音の結ぶ世界―』三二頁以下・名著出版・一九九〇）。なおこの点については次章でも触れます。（一）の伝説では、大蛇が住んでいた池の水を掻き回すと、雨が降るといっていますが、ここにも竜は雨の神であり、これを怒らせれば雨が降るという意識が見られます。この伝説に現われる竜に化身した梵鐘には、本来雨を

降らせる能力があると信じられていたのではないでしょう
か。

(三) おや子石 (上伊那郡高遠町御堂垣外・中条)

ずうっとむかしのことだ。大じしんでな、地山がくず
れて、ドドドゥッと土砂が、おしだしたと。

地山には、おや子の山犬がすんどったが、おったまげ
て逃げだしたとき。さきに母犬が、小犬をつれてな。

あとから追いかけてきた父犬は、ワン、ワン、ほえな
がら逃げていった。が、御堂垣外まで来た時に、藤沢の
蛇ぬけにおしながされて、石になってしまったそうな。

母犬と小犬は、キャン、キャン、なきながら、どんどん
逃げた。けれども、おっかなくて、せつなくて、とうと
う中条でな、べったりすわりこんだまま、二つの石になっ
たとさ。

それだもんで、父犬の石を「犬石」といい、母犬と小
犬の石を「子つれ石」とよんだそうな。それから、

地山おしだす

犬石ほえる。

ないてにけるは、子つれ石。

と、うたわれるようになったとき。

それらの石は、今はない。道ぶしんにでもつかわれてし
まったのかな。――塚田正公『伊那の民話―信濃の民話

5』一四五頁・信濃教育会出版部・一九七六

伝説は地震のために山が崩れ、山に住んでいた親子の山
犬が逃げ出した。父犬は御堂垣外まで来たときに蛇抜けに
押し流されて、石になった。母犬と小犬は逃げたけれども、
恐怖と切なさで中条において二つの石になったという内容
です。

災害の本来の原因は地震ですが、話の展開からしてそれ
が引き金になって蛇抜けが起こったようです。その蛇抜け
によって、山犬が犠牲になり、その象徴として彼らが石に
なったのです。この伝説は、先に見た洪水の伝説の第一章
(七) で市田の出砂原にかかわる市田駅前前の山三魚店の裏
庭の大石、第一章(八)の子泣き石と共通性を持ちます。
特に子泣き石とこの伝説では、蛇抜けの記念碑として、蛇
抜けによって運ばれた大石が犠牲者の供養と一緒に、災
害を記憶する手段とされていることは注目されます。

(四) 犬石 (上伊那郡高遠町御堂垣外)

昔、地山が押し出してきたとき、大石、犬石、子犬石
の三個の犬石が鳴いて逃げた。大石(親石)は強いので

地山のすぐ下に止まり、女親石は五〇〇メートルほど離れたところに止まり、子供石は八キロメートルはなれた長藤村の中条という所に止まったという。―『長野県史』民俗編・第二卷（三）五八三頁・長野県史刊行会・一九八九）

この伝説は先の伝説の異なる形態のものです。基本的内容は変わりませんし、その意義も同じだといえるでしょう。これまで見てきた蛇抜けの伝説は、蛇抜けが天竜川の支流部分でいかに恐れられていたかを伝えていると思います。蛇抜けという語の説明は色々ありますが、土石流が蛇抜けと呼ばれたことは、大蛇が抜けたことによってこの災害は引き起こされているという理解が底辺にあったのでしょうか。前章で洪水が大蛇と関係して理解されたことについて触れましたが、蛇抜けもまた同様の性格をもつものだったのです。

第三章 竜と釣鐘と雨・水

これまで触れてきた伝説によって、天竜川の洪水と竜とが深い関係にあり、その支流で引き起こされた土石流、すなわちこの地方で蛇抜けと呼ばれる災害が、竜＝大蛇によってもたらされるという考え方があったことが明らかになりました。そこで次に、洪水が竜そのものが原因になって起こるという考え方を前面に出した伝説を確認していきたいと思えます。

（一）功德寺の鐘（茅野市北山湯川）

この先二〇メートルばかり先に寺があるんですが、この寺の釣り鐘を、大昔、伝えられている話ですが、盗んで、諏訪市の向こうの岡谷市ですが、岡谷市の小坂観音へ持って行こうとして、ま、盗んだから、寺のだれもないときでしょう。そしていって上諏訪から諏訪湖を船に載せていくと、近いわけ。船に載せていたら、非常にいいお天気だったのに、小坂の岸へつく少し手前に、それこそ一天にわかにかき曇り、そして諏訪湖が極端に荒れ

て、そしたらしたから竜が出てきて、その鐘をぐっと巻いて海の底へ沈めちゃった。諏訪湖のそこへね。そして鐘が下へ沈んでしまったら、天気はまたもとの静かな晴天にもどってしまったという。で結局、竜宮から取りに来たんだといういい伝えがあった。―『長野県史』民俗編・第二巻（三）六一〇頁・長野県史刊行会・一九八九

伝説では、茅野市の湯川の寺の釣鐘を泥棒が盗んで、諏訪湖を船で渡って岡谷の小坂観音へ持っていくとした。ところが当日は非常に良い天気だったのに、小坂の岸に着く少し手前で、一天にわかにかき曇り、諏訪湖が非常に荒れて竜が出てきた。そしてその鐘に巻き付いて諏訪湖の底に沈めた。鐘が底に沈むと同時に天気はまたもとの静かな晴天に戻った。これは鐘を竜宮から取り戻しに来たのだといわれたとしています。

ここで問題なのは、鐘を取りに来たのが竜であり、竜が湖から鐘を取るために姿を現わした時には、一天にわかにかき曇ったということです。伝説には出ていませんが、おそらくこの間に暴風雨でもあったのではないのでしょうか。つまり、竜が怒ると天気は悪くなり、大暴風雨が呼び起こされるのです。

ちなみに諏訪湖の湖底や天竜川に鐘が沈んでいる、沈んでいたという伝説は他にもあります。参考までにそうしたものを挙げておきましょう。

（二）湖底に沈むつり鐘（岡谷市）

ずいぶんむかしのお話です。

まっさおな諏訪湖の水が、するするとながれて天龍川となります。そのくちもとに花岡（岡谷市湊花岡）というところがありました。

そこは水神ぶちといって、諏訪湖のうちでもたいへんふかいところでした。

なんでもこのふちに、大人が両手をぐっとひろげても、まだそれよりもでっかいという、とほうもない大なまずがすんでおりました。

この大なまず、夜はひっそりと湖の底ふかくもぐりこんでじっとしているが、ひるまになると、のっそり水の上にかびあがりました。湖の岸をあるいている人、湖の上で魚をとっている人をみれば、さっと、目もとまらぬはやさでおそいかかって、ガブリと、ひとおおいにくいころすのです。

ですから、このきんじょの人たちは、うんとおっかな

がり「大なまず」ってことをきいただけで、もうまっさおになり、みんながくぐくとふるえあがりました。

この話をきいて、このところにおいでになる龍神という神さまはとっても心配になり、なんと大なまずをやっつけたいと思いました。けらいの「おとぼう」にめいれいして、退治させることにしました。

おとぼうは、魚のようにすいすいとじょうずにおよぎ、またどんなにおそろしいけれども、す手でまかしてしまふというごうけつものでした。

さっそくおとぼうは水神ぶちにでかけました。大なまずは、まっていたとばかりおとぼうにとびかかり、湖の中へひっぱりこみ、はげしくつかみあいになりました。

バシャ、バシャ、湖の波が大あらしのように大ゆれです。水の上で上になったり下になったり、また、つかみあったまま水の中にはいつたきり、しばらくでてこなかったりしました。

両方とも血だらけです。ものすごいかくとうです。おとぼうは、なんどもあぶなかったが、さいごに大きなげんこつで、みけんをいやというほどガンとなぐりつけました。さしもの大なまずもこれにはたまりません。でっかいおなかを上にだして、ぐたっと気ぜつしました。お

とぼうは大なまずの首ったまを、ぎゅっとなわでしぼりあげ、自分のせいより長い大なまずをひっかついで、龍神さまにみせようと、花岡の坂を、えっこらえっこのぼっていきました。

すると、いままで死んだようにだらっとしていた大なまずが、きゅうに、ビュッとからだじゅうの力をこめて、ひとはねはねました。

さすがのおとぼうも、ふいをくらってはねとばされました。そのあいだに大なまずは、ゆうゆうとふたたび水神ぶちの底ふかく、つんもぐってしまいました。（それからあと、このところをなまず坂とよんでいます）

それから、ほんのちよつとのあいだは、なにごとなかったのですが、また、大なまずのやつ、人間をみればかたっぱしからおそいかかり、つぎつぎとくいころしました。まったく手がつけられず、どうしようもありません。みんなは、

「こまったことだ。こまったことだ。」

と、ただそういつているばかりでした。すると、ふしぎなことがおこりました。

花岡のすぐおとなりに、小坂観音がありました。このつりがねの音はとっても美しいということで知られてい

ました。

「ゴゴーン。ゴゴーン」

すんだうつくしい音は、諏訪じゅう、いや、十里四方にまでひびきわたりました。

道をゆく人は足をとめ、仕事をしている人は手をやすめ、泣いている赤ちゃんも泣くのをやめ、みんなはその美しく、しかも、おごそかな音に、すっかりききほれていました。

ある日のことでした。この小坂観音のつり鐘が、鐘つきどうにしっかりとつけられているのに、どうしたことか、すうっとひとりではずれました。あつというまに、あの観音堂のかけを、ゴロゴロ、ゴトンゴトンところがりおちて、パシャンと、それこそ諏訪湖がまっぷたつにわたれたかと思われるほどの大きな音をだして、底にしみみました。「観音様の鐘が諏訪湖におっこちちゃった。」小坂の人びとははちのすをつついたように、上を下への大きわざです。

あくる朝、村人は舟をこぎだしました。鐘は湖の底に、ちゃんとすわったようにしずんでいるのです。村人は二十ひろものなわを湖の中へいれ、鐘をぎりぎりまいて、みんなでヨイショ、コラサと、なわをたぐりました。お

もい鐘ですが、だんだんあがって水の上にかおがでて、もうひといきで舟の上にあがるといふとき、するっとすべりおち、ズブンとしずんでしまうのです。

それからあと、何回やってもまったくおなじようになっせずみ、どうしてもひきあげられないので、そのままにしておくことにしました。

そうこうしているうちに、ふしぎなことがおこりました。あれほどあらびにあらびまわった大なますが、ピタリととまりました。だれかが湖の中にしずんだ小坂観音のつり鐘が、大なまずの上におおいかぶさって、動けないようにしているのをみたっていいました。

「ありがたや、ありがたや、ほんとうに観音様のおかげだ。」

村人は、観音様のごいしんにひれふしました。

そこで、みんなであつまってそうだんし、湖にしずんだつり鐘とそっくりの新しいつり鐘をつくっておさめました。

それからあと、村はのんびりとした平和なさになりました。

ところがそのうちに、ほんのときどきですがこんなことがありました。ま夜中の湖の中から、

「ゴゴ　ゴンゴー、ゴゴ　ゴンボー。」

と、ひっきりなしに鐘をつきならす音がするんです。この鐘がひびくと、それからあと、きつと国になにごとか大きなかわったことがおきたそうです。ちかくは日清戦争（いまからおよそ七十年前、日本といまの中国とのたたかい）のとき、また日露戦争（いまからおよそ六十年前、日本とロシアとのたたかい）のときも、そのおこる前に、さかんになりひびきました。

このときは、むこうぎしの上諏訪までもガンガンときこえたそうです。いっただれがつきならすのでしょうか。きつと、あの大なまずではないか、という人もいます。

また小坂のだれさんだったか名前をわすれちゃったが、ずっと前のよくはれた日、諏訪湖の水がすきとおって底まで見えたとき、しずんでいるつり鐘をみたっていてました。―（竹村良信『諏訪のでんせつ』一三一頁・信濃教育会出版部・一九六五）

ここでも諏訪湖の小坂観音の沖に梵鐘が沈んでいるというのですが、宝暦六年（一七五六）の序文をもつ『諏訪かのこ』には小坂観音の説明として、「此観世音は往昔漁網にかゝりて出現し給ふと也。此下の海底に昔より釣鐘あ

り」（諏訪教育会編『復刻諏訪史料叢書』第四卷三三頁・中央企画・一九八四）と記されていますから、ずいぶん古くからあった伝説と考えられます。

（三）黄金の鐘（岡谷市川岸三沢）

むかし、三沢の高尾山のきわに、お寺があったच्छう。

ある朝、おっさまが、おつとめをすませて、お寺の門のわきに立って、天竜川をながめていたら、流れのまん中に、ピカッ、ピカッと、光るもんがあったと。川の水が朝日にてらされて、光っているかと思ったが、ほうではねえようだ。

「ありや、いってえなんすらか。」

と、おっさまは、じっとみていたच्छう。ほのうちに、光ってるもんが、だんだんつり鐘の形に、めえてきただつて。

おっさまは、たまげて、あわてえて、川ばたへ飛んでいってみたつて。

ほうしたら、やっぱし水の底に、つり鐘がしずんでいたと。川の中へ、へえって、やっさ、あげてみると、鐘は高さが、四、五十センチぐれえの、ちっくい鐘だと。

水の中に、長くしずんでたで、まっ赤にさびてたって。

「なあんだ、こんねんきたねえ鐘か。」

と、おっさまは、あわてて題目をあげたと。すると、ふしぎにも、四つのアミダ様がピカッ、ピカッと光ったと。「こりゃ、尊い鐘だ。」

と、おっさまは、だいじに持ちけえって、本堂の軒につるしておいたって。

ほうして、朝と夕方鐘をついただって。

「ゴォォー、ゴォォー。」

と、こんなさびた鐘の、どっからでるか、たまげるほどの美しいひびきが、村のすみずみまで、伝わった。村のしょうは、ほの音をじっときいてたと。

ほれから、ふしぎなことに、鐘がなっているあいさは、鐘にきざまれてる四つのアミダ様が、ピカッ、ピカッと、金色にひかかって、目をひらいていらねえんだって。

ほのいとに、いまっと、ふしぎなことがおきて、村中の評判になったと。

村のしょうが、お寺にお参りして、「ゴォォー。」

と、ひとつ鐘をつきゃあ、ほの人は、いろいろな災難にあわねえだって。

「ゴォォー、ゴォォー。」

と、ふたつかねをつきゃあ、ほの人は病気に、かからねえだって。

「ゴォォー、ゴォォー、ゴォォー。」

と、みつつきゃあ、ほの家のしょうは、みんな仲良くくらせるだって。ほして、

「ゴォォー、ゴォォー、ゴォォー、ゴォォー、ゴォォー。」

と、よつつきゃあ、ほの家は、おでーさまになれるだっちゅう。

むらのしょうは、うわさをきいて、ほんなら、おらもおれも、わしらもと、男も女も、年よりしょうも、お寺にお参りし、つり鐘を、ばんてについたって。

ほれで、ひんがら、ゴォォーと、すんだひびきが、村中へ流れて、村のしょうの心を洗ってくれたと。また、鐘をついたしょうは、ピカッと光るアミダ様をおがんじゃあ、

「なんて、尊い鐘ずら、おありがてえ。」

と、地べたに、へえつくばったって。

ほのいとに、うわさは、ふんとなったと。鐘をついたしょうは、災難にゃあ、あわねえし、病気にゃあ、かからねえし家中仲良くくらせるし、ほれにみんな、おでー

さまになったって。ほれだもんで、村は、ゆたかで楽しいくらいが、できるようになたって。

村中がしあわせになれたのは、つり鐘のおかげだし、鐘がなっているあいさは、金色に光るもんで、村のしょうは、これを、「黄金の鐘」っていつて、とーてもだいにしただって。

ほれだが人間ちゅうもんは、おうちゃんもんだ。災難はねえし、病気にかからねえし、家中仲良しで、ほのうえ、おでーさまとくりゃ、なんにも心配はねえ。村のしょうは、朝っぱらから、ほれ、うめえもん食えや。ほれ、酒のめやって、毎日遊びくらしてたと。

ほれだもんで、田んぼや畑は、草ぼうぼうで、村のしょうの心は、すっかりあれちまったと。おっさまは、はじめ村のしょうが、しあわせになれたもんで、おありがてえと喜んでたが、こんねん遊びくらしちゃあ、村はだめになっちまうと思ったと。ほこで、鐘をみつつくことはいいが、よっつは、つかせねえことにしたちゅう。

村のしょうは、おっさまの氣持がわかり、前のように田んぼや畑の仕事に、せーだすようになったと。

けれど、人間ちゅうもんは、いっぺんうめえ味をおぼえると、だめなもんだ。誰かがおでーさまのくらしが忘

れられなくて、ま夜中に、こっそりいつて、そうっと、よっつ鐘をついちゃったと。なんぼう、そうっとだつて、鐘の音は、村中へ知れちゃったと。ほいじゃあ、おらも、おれも、わしもと、みんないっちゃあ、

「ゴーオオーン、ゴーオオーン、ゴーオオーン、ゴーオオーン。」

と、ついちゃっただつて。

おっさまは、こまったもんだ。こまったもんだ。いい考えはねえもんかと、さんざ考えただつてー黄金の鐘がなかったら、こんなことじゃあ、ならなんだに……ほうだ、いいあんべえに、高尾山に底無しの井戸があった。(アミダ様にゃ悪いが、ほこへ持つてつてしずめさしてもらうか) って、考えたつて。

やみのこいある夜、おっさまは、黄金の鐘をはずして、誰にも、わからねえように底無しの井戸へ、しずめちまったつて。

ほれからあと、村のしょうは、前のように、ひんがらせーだして働えたと。

いまでも、女高尾山の中ふくに、底無しの井戸が残つてゐる。ほれが黄金の鐘を、しずめてある井戸だと。鐘は、まだ、ほのまんまだちゅう。

いつだったか、誰かが十五メートルぐれえの竹ざおを、井戸へおろしてみたが、先は、水のとこにとどかなんだと。―（竹村良信『諏訪のむかし話』九六頁・信濃教育会出版部・一九八一）

この伝説は遠州小夜の中山（静岡県榛原郡金谷町）の無間の鐘伝説を下敷きになっているものと思われます（笹本正治『中世の音・近世の音』六九頁以下）。

（四） 釣鐘淵（下伊那郡天竜村）

平岡村を流れる天竜川に釣鐘淵というところがある。昔ここから釣鐘が上がったので、すぐさまそれをお寺へ納めておいた。日照りが続いて、いよいよ田畑の作物が枯れるという時、村中総出の雨乞いには、この釣鐘をそのところの淵に沈めて水で洗えば、必ず雨が降るということであった。―（『下久堅村誌』一八五頁・下久堅村誌刊行会・一九七三）

（一）（二）の伝説でも、諏訪湖の主は竜のようです。そしてこの竜は（一）からすると天候を司っていた可能性があります。竜は雨の神様だということ（高谷重夫『雨の神―信仰と伝説―』岩崎美術社・一九八四）が重要な意味を持つ

ているのです。

また、（四）の伝説では梵鐘は淵から上がって来ましたが、その鐘は雨をもたらすものといえます。そしてこの雨を降らすというのは、これまで述べてきた伝説からすると竜＝大蛇の専売特許だったはずです。前章で見た（二）の伝説においては、梵鐘が淵に入って竜になってしまいましたが、これまで見てきた伝説からも竜と梵鐘との関係の深さが読み取れます。

第四章 竜がもたらす洪水

前章では、竜が雨や暴風雨・雷雨を呼ぶと信じられていたこと、そして竜は場合によると梵鐘に変身すると想像され、梵鐘が竜との関係もあって雨乞などに用いられてきたことを確認しました。

このことを前提にしながら、本章では既に第一章の（一）や（一七）の伝説をはじめとして、何度か触れてきた洪水などの原因として竜が意識されてきたことについて、引き続き伝説を素材にして考察していきたいと思えます。

（一）辰野と樋口（長野県上伊那郡辰野町）

昔朝日村の荒神山が伊那の東西両山脈の間を繋いで居たために、諏訪湖は此処まで一ぱいに水を湛えて居った。そしてその中にヌシの大蛇が住まって居た。ある年大洪水の折、荒神山の途中が切れて湖水の水は一時に天龍川へ流れ出し、其の跡が次第に涸れてやがて平地になった。そしてヌシの蛇は居所を失くしてそれも此處で死んでしまった。辰野と云ふ名前はそのため出来たのだと云つ

て居る。そして荒神山が崩れて水が流れ出した所が今の樋口だと云ふのである。――（岩崎清美『伊那の伝説』二
三九頁・歴史図書社・一九七九）

伝説によれば、昔は荒神山が伊那の東西の山脈をつないでいて、諏訪湖は現在の辰野町のあたりまで水をたたえ、その中に主の大蛇がいた。ある年の洪水で荒神山の途中が切れ、諏訪湖の水は天竜川に流れ出し、そのあとが次第にかれて平地になった。大蛇はいる場所がなくなり、ここで死んだ。辰野という地名はそこから来ているという。いわば地名の成立の伝説です。

ここでも湖の主の大蛇と洪水とが、セットになって語られています。諏訪大明神が蛇体であったことは有名ですし、既に見た伝説のなかでも、明神様が大蛇・竜として語られています。ですから、辰野に住んだという大蛇は諏訪大明神そのもの、あるいは眷族かもしれません。

（二）辰野の由来（上伊那郡辰野町）

大昔、ここに大きな海があって底に竜が住んでいた。ある年の夏、大雨が降って大水が出て一角がくずれ、海の水が流れ出してだんだん水が少なくなり、底が見えるくらいになった。そのとき一天にわかにかき曇り、竜巻

きが起きて竜が天へ上って行ったという。水がひけてしまうと海は一大野原になった。それからこのことを竜野（辰野）ということになった。―『長野県史』民俗編・第二卷（三）六一六頁・長野県史料行会・一九八九

この伝説は先の伝説と同じものです。また第二章の（二）とも共通性を持ちます。ここでは大雨が降って、水が出てから、竜巻が起きて竜が天に上ったということになっています。各地に竜が天に上る時には大洪水を起こして、その力を利用して天に上るという伝説が伝わっています（『日本伝説大系』第一卷二二頁・みずうみ書房・一九八五、同第八卷一〇〇頁など）。この伝説はそうしたものにつながり、この洪水が本来的に天に上ろうとする竜によってもたらされたのではないかということを想定させます。

これまでの話で、諏訪明神と竜との関係が深いことについて触れましたが、ここで念のためにそうしたことを示す伝説を確認しておきたいと思います。

（三） 尾掛松（諏訪郡下諏訪町）

うんと大むかしは、神様の世の中だったちゅう。その

ころの神様たちは、一年にいったん十月になりゃあ、日本中から、ひとり残らず出雲の国（島根県）に集まっちゃ話し合いをしただと。日本中の神様が、日本のほうぼうを、るすにするもんで、十月のことを、神様が、いねえちゅうことから、神無月というだって。

出雲に集まる時、神様たちは、それぞれいろんな姿になって、でかけただって。諏訪のお明神様は、うんとりっぱな竜の姿になって、でかけただちゅう。

ある年の十月の神様の話し合いの時だった。日本中から集まった神様たちが、口をそろえて、お明神様に、「諏訪のお明神様。お明神様の姿は、いつも、頭だけしか見えないが、体や、尾は、いったいどこにあるだね。」って、きいたって。そしたら、お明神様は、ハッハッハッと笑って、

「おれの体はなあ、この家を七巻半して、そして、尾は、諏訪湖のそばの、高い木に掛けてあるぞえ。」って、すまして、こたえたちゅう。

「へえっ、この家を七巻半もして……尾が、諏訪湖のそばの高い木に。」

って、まわりの神様たちや、目を白黒させて、たまげたって。体が出雲から、諏訪湖まで続いているちゅうこと

は、いまの中国地方の島根県から、近畿地方をこえて、そして、諏訪湖まで、えんえんと続いているちゅうことだ。だいたい日本の国の長さのはんぶんちかくになるもんで、とてつもない、でっかい竜ということになる。日本中の神様が、びっくりするのむりない。神様たちは、青くなって、

「お明神様。はるばる信濃の諏訪から、出雲までは遠いので、これからは、話し合いにこなんですから。話し合いのようすや、きまったことは、こちらからにかけて、おしらせにまいりますで。」
って、いったって。

「そりゃ、ありがたい。そうしてくりよ。」
って、お明神様は、でっかい声でいってから、みるみるうちに、黒雲にのって、諏訪湖へかえって、深くもぐったちゅう。

そのあと、諏訪には、十月も神様がいるもんで、神無月っちゅうもんはないだって。

また、お明神様が、
「尾は（大和）諏訪湖のそばの高い木（高木）に、掛けてあるぞえ。」

って、いったことから、そのあと、大和（諏訪市大和）



尾掛松

と高木（下諏訪町高木）という地名が、生まれただって。尾を掛けた高い木は、いまも高木に、尾掛松として残っているぞえ。―（竹村良信『諏訪のむかし話』一五七頁・

信濃教育会出版部・一九八一）

伝説の世界では、諏訪大明神の姿は大きな蛇、竜だったのです。そしてこの時に竜が尾を掛けたという尾掛松は現在も存在しています。

諏訪信仰の元になったものは何かと言うことに関しては、様々な説がありますが、その中から竜に関係しそうなもの

だけを確認しておきましょう。宮地直一は諏訪地方の原始信仰として、居住民の環境を基調として自らに発達した自然信仰の中に、山と水の崇拜、石と木との崇拜、雨と風との崇拜、竜神信仰を挙げています。そしてその最後の例としていわゆる泉小太郎と甲賀三郎の伝説に触れ、後者では「神道集」に収める諏訪縁起の竜神の問題。また「諏訪大明神画詞」に明神が竜の形にて現われたと出てくる事などを示しています（宮地直一『諏訪史』第二巻前編二二頁以下・信濃教育会諏訪部会・一九三二）。金井典美は諏訪神社が非常に早い段階から「蛇を象徴動物とする水神」として中央政府に認識されていたのではないかと指摘しています（金井典美『諏訪信仰史』四頁・名著出版・一九八二）。こうした指摘でもわかるように、諏訪の明神様が竜の姿をしていた事、竜神様が水の信仰と深くつながっている事は疑いありません。

再び水と関係の深い竜の伝説に帰りましょう。上伊那郡長谷村には次のような大蛇に関する伝説があります。

（四） 黒河内長者屋敷（上伊那郡長谷村 黒河内）

黒河内門気坂にさしかかる所一帯を長者屋敷と呼ぶ。

昔、この地に長者の住居があり、その長者に一人の美しい娘がいた。ところがこの屋敷に毎夜の如く遊びに通う若者があって近郷近在の評判となった。そのうちにその若者は戸倉山池の谷山中に棲む池の主、即ち大蛇の化身であるとの噂が伝わった。娘は真偽を調べようと、ある夜男の油断をうかがい、着物の裾に針を刺して帰した。ところが、次の夜若者は姿を見せず、天地の震動せんばかりの大暴風雨となり、たちまち三峯川は大洪水を起し、翌朝大蛇の屍が激流を流されてゆくのを見たという。――（『長野県 上伊那誌』第五卷民俗篇上一四四七頁・上伊那誌刊行会・一九八〇）

長谷村の三峰川にかかわる伝説です。長者の娘のところに通う若者があった。彼は大蛇の化身であるという噂がたつたので、娘は真偽を確かめようと、男の着物に針を刺して帰した。次の日若者は姿を見せず、天地が振動するような大暴風となり、三峰川は大洪水となった。翌朝大蛇の屍が激流に流されていくのが見られたという内容です。

伝説の筋からして、この時の洪水が娘に針を刺された大蛇によって起こされたことは確実です。ここでも大蛇＝竜は大暴風を起こす特別な能力をもつとされています。そして洪水とともに、ここでは屍ではありますが、竜が流れて

いったというわけです。これまで何度も触れてきたことからも明らかのように、竜が水害の原因をなしているという理解があったのです。

(五) 熱田神社と大蛇の骨 (長野県上伊那郡長谷村)

昔日本武尊が東夷征伐の帰りに、甲斐の酒折宮から山坂を越えて美和村の溝口へおいでになった。その頃三峰川の上流に大蛇が住まひ、折々出て来て人を害し、百姓の難儀は一通りではなかった。尊は此の話しを聞き召して大へんに気の毒に思はれ、ある日噂のある川上へ行って見ると、案のじよう大蛇が鎌首を挙げて尊をただ一と呑みと向かつて来た。尊は直ちに剣を抜いて立ち所に此れを退治なされた處、大蛇の血が河原を真赤に染めたと云つて、今其處を赤河原と称んで居る。百姓達は其の後尊の恩沢を慕ひ、此處に尾張の熱田神社を勧請して立派なお宮を建てた。その時境内の櫓の大樹の下から大蛇の白骨が現はれたので、一しよにお宮に納めてお祭りをした。今日お宮の宝物となつて居るのが即ちそれである。―(岩崎清美『伊那の伝説』八五頁)

これは日本武尊にかかわる伝説です。三峰川の上流に大蛇が住い、時々出てきて人に害していた。日本武尊がそれ

を退治した。このために大蛇の血が流れたので、今その場所を赤河原と呼んでいる。村人たちは彼の恩を慕つて、ここに熱田社を勧請したお宮を建てたが、そのとき境内から大蛇の白骨が出た。大体こういう筋です。

先に見た伝説が象徴的に示しているように、三峰川は度々水害をもたらす荒れ川です。その上流、水の出てくる場所に大蛇が住んでいたのです。ですから時々出て人に害をなしたという蛇の行為は、あるいは洪水のことを意味しているのかもしれませんが。

(六) 悪い滝の主を退治した勇士 (下伊那郡喬木村)

瀬戸の滝の主は大蛇でした。水の底の渦の中から出てくる大蛇の姿は大変恐ろしく、このため人々は決して瀬戸の滝には近づきませんでした。大蛇は毎年八月になると大水を出して阿島の水田を流してしまうのです。阿島の人々はぜひこの大蛇を退治してしまいたいと思い、毎年勇士が出かけて行ったが、どうしたものか一人も帰って来る者はありませんでした。ところがある年のこと、旅の武士が通りかかりました。その武士は腕が強そうに見えたので、村の人々は大蛇退治を頼んだところ「お任せ願いたい。必ず退治して進ぜよう」と引受けてくれま

した。翌朝、武士は瀬戸の滝へと向い大蛇を退治し戻って来ました。武士は大蛇を退治した様子を村人に話しました。村人は感謝し武士をもてなしました。後になって、この武士は上郷の野底山の姫宮でヒト退治で有名な岩見重太郎であることがわかりました。それからは大水もなくなつて阿島の水田は秋になると稲穂が黄金の波を打つようになつたということです。――『喬木村誌』下巻七九〇頁・喬木村誌刊行会・一九七九

この伝説は、瀬戸の滝に住んだという大蛇にまつわるものです。この大蛇は毎年八月になると、阿島の水田を流してしまうので、勇士を頼んで退治しようとした。強そうな武士を見つけて依頼して引き受けてもらい、大蛇は退治された。後に、退治したのは岩見重太郎であることがわかった。それからは大水もなくなつたということです。

この話では大蛇が洪水の原因として挙げられています。必然的に大蛇を退治すれば、洪水はなくなり水田は流されなくなります。これまで述べてきた、大蛇が洪水をもたらすのだという理解がここにもみえます。

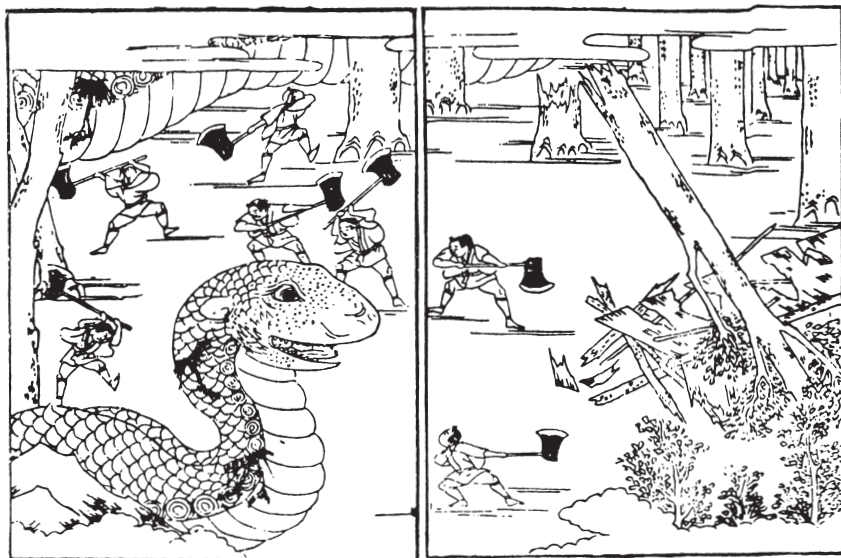
(七) 池口の大蛇 (下伊那郡南信濃村)

遠山郷の池口は、大昔凡そ二、三千年前までは池であ

り、大蛇が主として住んで居た。明神様の主であつた。下の方の地ばんの弱い処が大地震か何かのはずみで崩れ、池が一挙に押出して、大島、漆平島、屋の島、松島七島が其の時出来たと言伝えられ、大蛇は其の時諏訪湖に上つた。然るに池に居た大蛇を祭る事になったのは、池の底に大蛇のかくれ場が有つた。これは大事と言うので、諏訪明神として底の処に明神様として社を造り、現在も祭り続けている。――『高齢者の語り 第一輯 ふるさとへの伝言』一〇七頁・南信濃村教育委員会・一九八三

既に第二章(一)以降の伝説で触れたように、諏訪湖の主は、そのまま諏訪大明神であり、その体は竜の姿をしていたとされています。この伝説もそれに関わります。遠山郷の池口は、大昔は池で、大蛇が主として住んでいた。大蛇は明神様であつた。たまたま下の方の地盤が弱いところが崩れて、池が一挙に押し出した。この時に大蛇は諏訪湖に上つたということです。

ここでも池が一挙に押し出したことと、竜の移動とが関連付けられています。池の主は、諏訪大明神である大蛇だということです。これまで見てきた伝説の内容との重なりが見て取れるでしょう。



『遠山奇談』に見える大蛇（山村書院版）

（八）とうぢやげの池（下伊那郡天竜村）

下伊那の南端神原村字唐沢の奥の入り、俗にトウヂヤゲと呼ぶ所に昔大池があった。ヌシの大蛇、時々出で、水の出口を塞ぎ、そのために河の水の干上がること何度々あったので、その河のある所を、から沢と称ぶようになった。ある年大雨の時、池の堤が流れて河水氾濫、池の水がなくなってしまう為に大蛇は居所を失ひ、深見の池へ逃げて行った。

深見の池へヌシが来てから、近くの寺では鐘を撞くことを止めた。鐘の音を聞くとヌシが暴れ出すからだと言つて居る。―（岩崎清美『伊那の伝説』一〇二頁・歴史図書社・一九七九）

天竜村神原字唐沢の奥の入のトウヂヤゲに大池があった。この池の主の大蛇は時々水の出口をふさいだために、川の水が干上がることがあったので、その川のあるところをから沢と呼ぶようになった。ある年の大雨で、池の堤が流れて、川は大氾濫をした。池の水が流れてしまったために、住むところを失った大蛇は、深見の池（阿南町）へ逃げた。深見へ大蛇が来てから近くの寺では、鐘の音を聞くと大蛇が暴れだすからと鐘をつくのを止めたという内容です。前

半はから沢の地名由来、後半は深見の池の近辺で鐘をつかない理由説明になっています。

この大池の主は、川の水源に住し、川の水を出したり止めたりする力を持っているのですから、明らかに水を司る神様です。この大蛇が他所へ移動するに際しては大氾濫が契機になっています。竜野の竜は大洪水で天に上りました。遠山の大蛇は池の水の押し出しで諏訪湖に移りました。大體もといた場所より広い場所、もしくはもっと良い条件の場所に移っているわけです。この伝説でも唐沢の奥の大池より、深見の池の方が広くて大きいので、そちらに大蛇は意図的に移った可能性があります。その際に洪水が引き起こされたわけです。やはり洪水の原因は大蛇＝竜と考えられているのです。

このことに関係して、鐘をつかない原因が考えられます。既に触れてきたように梵鐘は竜の化身であり、これを利用して雨乞も行われてきました。ですから鐘を鳴らすことはそのまま、深見の主が大雨を降らす、洪水がやって来るということにつながっていたのではないのでしょうか。それだからこそ、鐘をつくのが忌まれたのだと考えられます。



深見池の祇園まつり 一池の主をなぐさめる水まつり—
(『山の湖』信濃毎日新聞社刊より)

(九) 大蛇が池 (下伊那郡天竜村)

平岡村字宇連の今小学校のあるあたりは昔は大きな池で、青く湛へた水の底には大蛇が住むと云はれて人たちは怖がつて居た。ある年大地震が起つてその池の堤が崩れた時、ヌシの大蛇は池を抜け出て、和知野川を下つて天龍川へ出て、河の流れを遡つて行つた。その時は水の上に大きな横波が打つて、大蛇の背中の鱗折からの夕陽にきらきらと金色に光つたと云ふ。

天龍川を上つた大蛇は太下條村の深見へ行つて、其所に大きな池を作り、それから其の池に住むようになった。今の深見の池が即ちそれである。―(岩崎清美『伊那の伝説』一〇六頁・歴史図書社・一九七九)

この伝説も前のものに類します。平岡小学校がある辺りは昔は大きな池で、水の底には大蛇が住むといわれていた。ある年大地震が起つて池の堤が崩れたとき、大蛇は池を抜け出て、天竜川に入り、深見の池に入った、とのことです。基本的には前の伝説と変わりません。

(一〇) 先途のお池の主 (長野県下伊那郡天竜村坂部)

むかし先途つてうとは、三軒あって、場のでえら(平ら)のいいとこだった。

そこに池があつて、先途のある娘が、毎朝その池を鏡にして髪の毛をすいておつた。

そこを先途のお池の主が見ておつて、この娘をどうしても嫁にしたいと思うようになった。そこでお池の主は、蛇の体を人間の格好に変えて、この娘と愛し合うようになった。

ところがあるとき、この二人はひょんなことで仲が悪くなつてしまった。お池の主は怒つて、この娘をお池に引っぱりこんだつて。

お池は荒れたくつて、一面にナギ(地すべり)になり、池はなくなつてしまった。そのときには、ナギの石が、この蜂山越えて、富山の大谷つてとこまで落ちたつて。

この虫川も、それまではずっと浅かったそうだが、それからはおそろしく深くなつて、今ではずっと下を水が通つとる。先途に三軒あつた家も、ナギで流されて、一軒きりになつてしまつたつて。―(『長野県下伊那郡天竜村 坂部民俗誌稿』一二二頁・長野県史刊行会・一九八五)

同じ天竜村に残る伝説です。昔先途には池があつた。娘がその池を鏡にして髪の毛をすいた。池の主の蛇はこの娘を嫁にしたいと考え、若者に変身して愛し合うようになった。ところが二人は仲が悪くなり、池の主は娘を池に引き

込んだ。池は荒れ、一面に地滑りが起き、池はなくなってしまう。付近の虫川はこの時から深くなり、先途に三軒あった家も一軒になった。

伝説は虫川が深くなったことと、先途の家数が少ない説明になっており、その理由は池の主の蛇が原因でナギが起きたということになっています。地滑りの原因は池の水が流れたためです。これは蛇抜け災害ということができるとしよう。

これまで見てきた伝説などから、大雨をもたらすことができる、池や川などの水を統御できる神の化身として大蛇Ⅱ竜が考えられていたこと。そしてその水を統御する能力のゆえに、洪水も竜が引き起こすと考えられていたこと。竜が洪水を引き起こす理由としては、竜の個人的な人間との関係とともに、竜そのものが住家をかえたり、天に上ろうとするようなときもあると考えられてきたことがわかったと思います。

もし洪水や蛇抜けがこのようにして引き起こされるのだとすると、その対策は竜に対処するものでなくてはならなくなります。ともかく、天竜川沿いに洪水などは竜がもたらすのだという考え方が色濃くあったことは確実です。

第五章 水害への対処

これまで、天竜川沿いの水害について、伝説を素材にして考察してきました。では、天竜川沿いに住んだ人々は水害にどのようにして対処しようとしたのでしょうか。現代では治水といえば堤防の構築などが主体です。しかしながら、前章で見てきたような、竜Ⅱ大蛇が水害の原因だというような考え方が強かった時代には、堤防以上に重要だったのはそうした竜を、どのようにして押えるかということだったと推察されます。そこで、最後に同じく伝説などを通じて天竜川沿いの人々がいかにして水害を避けようとしたかを、主として住民の精神的な面に光を当ててみたいと思います。

〔水神を祭る〕

水害が水を司る神である竜によって引き起こされるといふことならば、水害に対処するには私達とは異なる世界の住人である竜をも従えうる力のあるものが必要になります。

そのために想定されたのが水を押えることのできる神様です。以下、そうした水害から守ってくれる神様について確認してみましよう。

(イ) 弁天の森の弁財天 (下伊那郡波合村)

享保六年(一七二二)の大水害は当村に大きな影響を及ぼすものであった。(中略)四十七軒あった町並のうち、半分以上の二十九軒が流失したというのであるから当村にとっては大変な大水害であった。この水害のため町頭にあった関所が現在地に移転されたのであり、同八年に弁天の森に水難鎮静を祈って弁財尊天が祀られたのであった。―『波合村誌』五二八頁・波合村誌刊行会・一九八四)

ここでは大変な水害の後に、水難の鎮静を祈って弁財天が祭られたといえます。弁財天は元来、インドの河の神として崇拝された神です(『日本宗教事典』四〇〇頁・弘文堂・一九八五)。江戸時代には元の姿が蛇神であるということから、水の縁の深いところに祭り、卵を供えたり、蛇の彫刻をしたりしました(関口正史・中尾堯「弁才天」・『大百科事典』第三卷六七八頁・平凡社・一九八五)。右に見られるのは、そうした河の神として弁財天を祭り、そ

れによって洪水を押えてもらおうという思想です。

(ロ) 寛政五年(一七九三)の「下市田邑堤防之御銘」
(下伊那郡高森町下市田)

寛延戊辰(元年＝一七四八)堤堤を下市田邑に築く。河上旧と鍋弦の堤あり。歳々破壊し修起数々すれども新築を潰す。茲に旧堤と退く者若干歩。禹余石を本として河に順ふて斜めに築く。河伯を祭祠して禹余堤と名づけ碑を道傍若干歩の山下に立て事を記す。―『市村咸人全集』第一卷一四二頁・下伊那教育会・一九八一)

ここでは堤防を築き、河伯を祭ったと出てきています。河伯は河の神、水神のことです(諸橋轍次『大漢和辞典』卷六一〇一六頁・大修館書店・一九七四)。堤防を守ってもらうために、水神が祭られたのです。

(ハ) 惣兵衛堤の天伯森

上の亀甲石の西南九十間を隔てた所に天伯様を祀る小祠があつて、周囲は大きい森になっていた。(中略)この祠も取入れ口や用水路の位置、規模を決定する基点であつたのである。―『市村咸人全集』第一卷一六六頁)

惣兵衛堤は宝暦二年（一七五二）にできあがりました
『市村咸人全集』第一巻一三九頁・下伊那教育会・一九八一、同『惣兵衛川除』建設省中部地方建設局天竜川上流工事事務所・一九九一）。前の河伯と同じものを指すのでしょうか。この場合、その水神様が天伯だったというのです。天伯は天竜川流域に広く知られる神で、霜月祭りなどでも重要な役割を果たしています。治水の神様として重視されたものでしょう。

（二） 宝暦七年（一七五七）の満水（下伊那郡喬木村）

宝暦七年五月の満水には伊久間村も大被害をうけ村方七分が流れ、そのため川除三社を祀ったといわれる。――『喬木村誌』上巻五五一頁・喬木村誌刊行会・一九七九）この場合には具体的な神様の名前はわかりませんが、ともかく水害を避けるために川除三社を祭ったのです。

（ホ） 水神祭祀と百年記念碑建立（上伊那郡大鹿村）

弘化四丁未（一八四六）三月、開発発起人中尾中根明右衛門、文蔵栗山久蔵の名によって、島川原新田を水害から守るために、金毘羅大権現、法性大明神、九頭竜大権現を勧請し、石に刻して島川原水田仲間が祭祀した。

――『大鹿村誌』上巻六〇六頁・大鹿村誌刊行委員会・一九八四）

弘化四年に開発された島川原新田を守るために、金毘羅大権現、法性大明神、九頭竜大権現を勧請したとのことでした。新田開発を行うようなときにも神の力は期待されていたのです。

以上は、年号の入った伝説です。以下もう少し一般的な話や、記載をこの地方の市町村誌類などから見ておきましょう。

（ヘ） 洪水に対処する神（上伊那郡）

天変地異を天狗とか竜神とかの、超人的な所為と信じたのは原始信仰の名残である。町村誌の書き上げ中に祭神は不詳として、社名を天狗社としているのが七社もある。池の神社とか、池の明神とかしたのもある。その他の変移に神社を建てて神霊を鎮め、そうしてその神に依って異変から逃れようとしたのである。伊那市の新田は、三峰川が此所に来て広がり天竜川に合する沿岸である。そして東部山岳地帯の豪雨にはいつも洪水になる地籍であるが、常には広く豊かに展げた地であるから狐島等か

ら出て開拓したところである。しかし時折りの洪水氾濫には開拓農民も手のつけようがなく、自然のなすがままに任すより仕方がない。それでも最後に考えられたことは神を祀り鎮魂を祈ることであった。荒れ神といわれる須蓋鳴尊を祀る荒神社が六座もあり、水に關してか弁財天社が一座ある。―『長野県上伊那誌』第二卷歴史編一二八六頁・上伊那誌刊行会・一九六五

(ト) 天伯 (伊那市)

「さんよりこより」の踊りで有名な美鷲の川手や、富県の桜井の天伯社の祭りは、応永年間(一三九四―一四二八)の洪水にまつわる縁起をもっていて、天伯は洪水除けの神として信仰されてきたという。―『伊那市史』通史編六三四頁・伊那市史刊行会・一九八四

(チ) 天白信仰 (下伊那郡泰阜村)

天白社(天伯社)の祭神は、天棚織比売命や瀬織津姫を祀る。いずれも七夕祭りの星祭りに因む祭神で、雨、水に關係を持つ神として、五風十雨の順調な天候とこれによる五穀豊饒を祈る神とされた。天白社の中には河童を祀るという土俗神もあるが、これも水を守る神として

信仰された。―『泰阜村誌』上巻四三二頁)

(リ) 水に關する神々 (下伊那郡豊丘村)

人間生活上最も大切な火と水とは太古よりその神靈をみとめて、火の神、水の神として祀った。農耕上、水田、水利治水を守る神の信仰は特別篤かったようである。田村々の伝説に瀬分け鎌がある。洪水の時諏訪社の薙鎌を天竜川の瀬に立てて水の瀬分けを祈ったと伝えている。各村の堤防や出水には治水、水利の安全を祈る水神があり、旱魃の雨乞に諏訪神社の御天水を迎えた。水神には九頭竜権現・水速女命・弁才天・水天宮・罔象女神・戸隠神社などが祭られている。水天宮は俗に安産の神としても祭るが、大体は堤防上や堤の岸にあって水防の神として祭ったものが多い。―『豊丘村誌』上巻六八八頁)

(ヌ) 安永八年(一七七九)に葛上紀流が書いた『木の下

陰』に見える水神岩 (上伊那郡高遠町)

勝間村より下り口の河原にある大石を水神岩といふ―『蓆原拾葉』第九輯七八頁)

(ル) 水神様 (下伊那郡鼎町)

水神関係の碑は、まず飲用水や灌漑用の安全と確保から、次に水難防止の願いから、さらに水難犠牲者の供養のため等から祭られて居り、飯田松川沿岸には特にこれらの碑が多い。

飲用水や灌漑用のために祭ったものは、伊賀良井取入口を始め、分水地点に多数見受けられる。また一色や名古屋地区の簡易水道設置の際のものもある。

松川は暴れ松川といわれ沿岸はしばしば大水害に襲われたことから水難防止を願って祭ったものが多い。天伯の松川大明神、これは元若宮にあったもの。天伯の祭神の一つ九頭竜権現。下茶屋の水神宮、西鼎二、三丁目の水神(天保期)。同四丁目の水神等。また水天宮は西鼎の二、三丁目と下茶屋、共に明治二十二年(一八八九)。下茶屋の碑は水神と併刻。松川プールしたの籠大神碑、大正十三年(一九二四)がある。祭神は天水別神で分水を司る神。ここでは堤防を守ってもらうことを願って祭ったという。これらの碑の多くは大水害の出た直後に建立されたものが多く、二度と水害に逢わぬ様にとの痛切な願いがこめられている。―『鼎町史』下巻一〇六八頁・

鼎町史刊行委員会・一九八六

(ヲ) 水神 (下伊那郡喬木村)

水難から免れるために祭ったものであり、天竜川、小川川、加々須川筋に多く、家庭の井戸等に建てられたものもある。―『喬木村誌』上巻八三六頁)

(ウ) 石神松 (上伊那郡中川村大草)

昔、石神松の真下にある天竜川のカマンブチに大きなこいが住んでいた。ある年の洪水に、ふち(淵)の外に跳び出てかわいて死んでしまったので、里人が死がいを今の石神の地にあつく葬り、塚を築いて水神としてまつたという。―『長野県史』民俗編・第二巻(三) 五七八頁・長野県史刊行会・一九八九

(カ) 津島講 (下伊那郡清内路村)

素盞鳴命を祭り、津島神社は神仏習合で牛頭天王といわれ、水の神・悪疫退散の神として祀られてきた。川裾橋の橋場などでは、水天宮の石碑を祀り、春秋の道普請や橋の修復の時、榊七五三飾りをして供物を供えた。―『清内路村誌』下巻三五一頁・清内路村誌刊行会・一九

以上見てきたように、洪水を防いだりするために祭られた水神様には実に様々なものがあります。洪水は荒れるというので、荒れ神の素盞鳴命を祭ることがなされました。

また、この地方で広く見られるものに天伯があります。

この神の実態はよくわかりません。泰阜村では天白社（天伯社）の祭神は、天棚織比売命や瀬織津姫で、いずれも七夕祭りの星祭りに因む祭神だとされています。また、河童を祭るものもあるようです。鼎町では九頭竜権現も天伯の一つだとされています。

水神には九頭竜権現・水速女命・弁才天・水天宮・罔象女神・戸隠神社などが祭られていると言われています。このうち弁財天については既に触れました。

このほか名前を持たない、池の神社や池の明神もありますし、鯉の死骸を葬った塚も水神とされています。多様な神々が、洪水などを防ぐ水神として祭られていたのです。

天竜川流域の洪水頻繁地や、深い淵などには弁財天や天伯社などが祭られています。そのほとんどには何のために祭られたかという由緒が伝わっていませんが、本来は水を治めるために勧請された可能性が高いのではないでしょう

か。

「経塚」

日本では、神と仏との間にほとんど区別がありません。先程も水神のなかにも日本古来の神もあれば、インド起源の神もあります。そこで次に仏教と治水との関係について少し触れてみたいと思います。

（三）経塚（伊那市東春近 六軒屋）

六軒屋の涯ぎわに、小さな塚が点在していて経塚と書いていた。昔、洪水を防ぐために読経して水難除けを祈願し、経を埋めたところという。以前四十八ヶ所あったというが、今は開墾の際崩されてその数が少ない。――

『長野県 上伊那誌』第五巻民俗篇上一四二五頁・上伊那誌刊行会・一九八〇、この伝説は『東春近村誌』一〇三六頁・東春近村誌刊行委員会・一九七二にも採録されている）

（夕）河成の事（伊那市東春近）

車屋から榛原へ上がる段丘のはぶちに、経塚というと

ころがある。ここには昔、十二ほど塚があったが、いまはない。伝説によると三峰川の洪水がないように、また、氾濫時には早く治まるように、殿島の人々が経をあげたということである。塚というからには納経も行なわれただろうし、洪水防止のたしかな祭祀遺跡といえる。――『東春近村誌』二二八頁・東春近村誌刊行委員会・一九七二

(レ) 車屋区の水害除経塚 (伊那市東春近)

『車屋区誌』によれば「車屋区(東春近)三軒屋坂上に小墳あり。往時三峰川氾濫の際、水害除の祈禱を行ない経文を埋めた所である。一二か所あった。」とあり、現在は段丘の突端に一つ残されている。また、近くに般若畑といわれる地があり、これも水害除に大般若経を転読した所だという。――『歴史の道調査報告書 天竜川』四六頁・長野県教育委員会・一九九〇

(ソ) 安永八年(一七七九)の『木の下陰』

三峯川のうち山田、小原、芦沢、出会いの島を、大般若島といふ、古へ般若経を納る故に名付く、いかなる洪水にも流れずといふ――『落原拾葉』第九輯一〇五頁・

名著出版社・中巻二八〇頁)

(ツ) 般若島 (伊那市 下新田)

本村の坤に当る。下新田の南方、三峰川の下流に至り、碌鍛たる河原に、般若島と称する平地あり。往古より洪水ありと雖も、今に此の地の流失したるを見ず。斯の所以を原るに、今を去る事二百五十余年前、寛永元年(一六二四)慶芳院不源と言ふ者あり、大峯山行者にして斯の地に堂宇を構へたり。然るに正保四年(一六四七)五月大洪水の時節、将に流れんとするに当り、般若経を転読して、其を免るる事を得たり。故を以て般若島と名づくと言伝ふ。――『長野県町村誌』三四六三頁・長野県町村誌刊行会・一九三六、郷土出版復刻・一九八五)

ここまでの伝説は一連のものです。基本的には、洪水を防ぐために読経して、お経を埋めた経塚があったということです。般若島という地名もこれに関わります。私達は仏教という、ついつい宗派の違いとか、教義を中心とした哲学的な側面を重視しがちですが、民衆にとってはこうしてお経そのものが災難を除いてくれる特別な力をもつものとして理解されたのです。仏教や神道のマジカルとしての側

面が重視されていたのです。

天竜川の水難も、お経の持つ特別な力によって免れるのではないかという考え方で、きわめて注目されます。このような水難を避けるための経塚は各地に作られた可能性があります。

「堤防の上の木」

災害に対処するための手段の一つとして、神や仏、お経の力を頼むことがあったことを述べてきました。それに関連して私が気になっているのは、堤防などに植えられた木です。

（ネ） 石神松（上伊那郡中川村）

石神は農の神、左宮司であるらしい。また伝説によると往古、天竜川の深淵でちょうどこの下にある釜ん淵（正しくは含満の淵といって本来は仏道修業の場であり、ほかにもこの名称の淵が諸所にある）に大きな鯉がすんでいた。世人はこれを天竜の主、九頭竜（大蛇とも）の化身と言っていたが或る年の洪水に、淵の外に跳りでて渴いて死んでしまったから、里人が今の石神の地に塚を

築いて、死骸を厚く水神として祀ったとも言う。また、ある人が陣馬形山に登って天竜川を眺めたところ、蜿蜒とって遠州の方へ流れていく川のようにすが、竜が天へ向ってのぼっていくのに似ているので、昔は天流川と書いていたのをそれから天竜川と書くようになったとも伝えているのに似ている。

またある老嫗は「この石神を息をしないで七廻りする」と青坊主が現われてくるのが見えるような」とも言っている。

また元和の頃（一六一五～二四）、常泉寺に一人の山伏が寄寓していたが、その法力が頗る顕著であった。その頃しきりに天竜川が氾濫してこれに悩んだ農民は、この行者に頼って水難除の祈禱をしてもらった。行者は熱心に経を誦し二十一日間祈願を続けたが、満願の日に精魂尽きてついにたおれた。彼は死に先立ちこの水神に手植えの松を手向けたが、これが即ち今の石神の松だとも伝えられている。だとすると樹齢は三五〇年内外になるわけである。――『南向村誌』七〇〇頁・中川東公民館・一九六六

（ワ）と同じ伝説です。この伝説の前半部分は既に第一章で扱いました。問題は後半の部分です。元和の頃に常泉

寺に一人の山伏が寄寓しており、その法力が顕著だったので、天竜川が氾濫して困っていた農民は、この行者に頼って水難除の祈祷をしてもらった。行者は熱心にお経を唱えて、二日間祈願したが、満願の日に精魂尽き果てて倒れた。彼は死に先立って手植えの松を手向けた。これがすなわち今の石神の松だということです。

近世以前には多くの山伏がおりました。山伏は生産活動には従事していませんから、常泉寺に寄寓していた山伏は、結局のところ地域の村人によって養われていたのではないのでしょうか。村人が彼の生活をみていたのは法力に期待してでした。そして彼に村人が求めたのは、天竜川の氾濫を治めることだったのです。山伏は治水の祈祷をする過程で死んでいったようです。先に洪水を防ぐ経塚について述べましたが、この山伏はそうしたことをしていた人の一端を伝えているのです。おそらく中世や近世にあれだけ多くの山伏をはじめとする宗教者がいたのは、その教義が理解されたからではなくて、彼らが持つと信じられた特別な能力のためだったのではないのでしょうか。すなわち彼らはこの世とあの世との接点に位置し、神々などに人間の意志を伝えたり、働きかけをする者として期待されたのです。

そうした山伏が、水神への手向けの松を植えたのが今の石神の松だといいます。手向けというのは「神仏に幣（ぬさ）など供え物をする」こと。また、その供え物」『日本国語大辞典』第一三卷一九七頁・小学館・一九七六）のことです。しかし、ここではその松自体が石神とされています。堤防などを作った際には、そこに水神などを勧請しました。これは神の力によって、水害を防ごうとするものです。ここで水神に松を手向けたのは、松を通して水神が来ることを期待していたからです。それなら、この場合、神様はどのようにしてやってくるのでしょうか。私はこの松が神社の榊や正月の門松と同じ様に、神のやって来る目印であり、それ自体が神とされたのではないかと考えるのです。

（ナ） 一本松の伝説（上伊那郡辰野町）

小野村の南方新田という所に、一本独立している松があった。田甫中の三州街道の道脇に、現在では枯れて切られてしまったが、伝説だけは残っている。

今を五〇〇年ばかり遡る当時、小野川は今の流れと場所を変えているが、小雨でさへ川は氾濫して田畑を荒す事が度々であった。それで農民の困難は一通りでなかったそうだ。時の庄屋が発言した。これはきつと何か

が祟っているに違い無いといって、これを鎮めるために

一本の松を植えたそうだ。処がそれからは川も氾濫する事も無く豊年が続いたという（これは多分防岸のために植えた松が一本だけ残ったのではないかと思う）。それから現在に至ったのだが、年老いて枯れてしまつて後を絶った。昭和十年に切ったが、木の中には水が五斗も入っていた。切った人は伝説を信じていた人だったので、また丁度切った後大水が出たので氣をやんで床に就いた。しかし十日ぐらいして回復したが、村でもこれに対して後を絶たない様に植えるという話があるが、今だに植えない。――『辰野町誌』近現代編一一二頁・辰野町誌刊行委員会・一九八八）

この伝説では、小野川が小雨でさえ氾濫して田畑を流した。そこで庄屋が何かがたたっているに違いないということで、堤防の上に一本の松を植えた。それからは川が氾濫することがなくなったといえます。

前の伝説からしても、この松は治水のために植えられたものといえるでしょう。たたりをもたらずものを制御することのできる力を松そのもの、もしくは松を通じて得ようとしたわけです。ここでの松は水神様が飛び移ることのできる目印、あるいは神の宿り木としての効果が期待された

ものと考えられます。

「開発と水害対処」

長い間日本人の生活の糧としてあった農業を行うためには、農地が必要です。人口が増えるとそれだけの食料を用意しなくてはなりません、各家などがより豊かになるためには新田の開発などが必要になります。これは直接治水と関わることです。これまでは、ごく大ざっぱに水害をいかにして防ごうととしていたかということで、日本人の精神的な面を見てきましたが、もう少し積極的に新田開発などにあたって、洪水などをもたらず神とどのように対応したのかを考えてみましょう。

（ウ） 貝暮ヶ渚と埋立工事（飯田市川路）

「大堰」の工事によって西河筋の流れが遮断され、旧河筋は大部分次第に新田化していったが、壁くる地籍より奥手前にわたる河床一帯は窪地であったため干上がらず、河水や雨水がたまつて一大池沼と化し、紺碧の色も濃く満々と水をたたえて出現したのが後世まで伝説的に伝承されている貝暮ヶ渚である。池名については何故に

「かいくら池」、「かいくらが池」という名称が起こったかは不明であるが、現実存在したことは間違いない事実である。

この神祕をたたえ蒼々とし水底に大蛇が住むと噂され、幾多の伝説、怪談をうんだ貝暮ヶ淵もいよいよ終りを告げる時がやってきた。元禄七年（一六九四）春、かねてよりこの池の存在を何の価値もないと考えた当時の竹佐役所は、下川路村の時の庄屋文太夫並びに組頭岡右衛門を呼び、貝暮ヶ淵を埋立て新田開発せんとする意向を伝えた。（一説には文太夫より埋立てを願ひ出たともいわれる）文太夫は早速これを受諾したが、このことが村内に伝わるや村人の驚きは一方ならぬものであった。何はともあれその池底に大蛇が住んでいると信じ畏怖している村人は、池を埋立てるなどまことに大それたこととその崇りを恐れて逡巡したが、それをなだめて、後日の祟りがないようにといういろいろ相談の結果、開善寺大和尚の発案により「人柱」を池底に沈めて犠牲にする案が立てられた。この人柱は生きている人間ではなく、墓場に立てられていた墓石をもって人柱代りに池に投げ入れて犠牲にし埋立てを行なおうとしたものであった。

これによって近隣に名高かった貝暮ヶ淵は埋立てられ

たがその埋立方法は駒沢を切り込み、更に近くの高所の土砂を運搬して埋めたと伝えられている。かくて貝暮ヶ淵は正保二年（一六四五）、脇坂侯大普請によって出現してより元禄七年の埋立てに到るまで、その存在期間はおよそ五〇年、その神秘的な池沼の姿をこの世に現わしていたわけである。――『長野県飯田市川路村誌』一九四頁・川路村誌刊行委員会・一九八八

現在の飯田市川路に江戸時代、天竜川の旧河道で貝暮ヶ池と呼ばれる池がありました。この池には大蛇が住むとされていたが、元禄七年（一六九四）に埋め立てて新田が開発されることになりました。村人は大蛇のたたりを恐れたが、開善寺の大和尚の発案で、人柱を埋めることにしました。それも生きた人間ではなくて、墓石を人柱のかわりに池に投げ入れて、埋め立てをするようになったのです。結局これが成功して貝暮ヶ淵は新田になったというのがこの話の筋です。

ここで注目されるのは、実際には墓石が代わりになったけれども、新田の開発にあたって人柱をすれば良いという考え方があったことです。ここでは人柱が竜に捧げられれば、淵を埋めて新田開発をしてもたたりがないと考えられたわけです。ここでは人間の力ではどうにもならない竜を

押えるためには、人間にとっても大事な人間の命を捧げるしかないだろうという理解があったのではないでしようか。ところがこの時には、墓石が代わりに用いられているのです。つまり、もう実際に人間の命ではなく、そのかわりのものでも良いのだという考え方です。墓石が特別な力をもつものとして意識されていたとしても、実際に人を埋めなくてもよいのだという考え方は、大きな意味をもつと思います。そうしてこのような考え方は近世的なものではないでしようか。

「洪水になった時に」

(ム) 明神様の瀬分け鎌 (下伊那郡豊丘村)

大昔、田村の明神様は字舞台というところにありました。大きな森があって、天竜川の瀬がすぐ森の下へ打ちよせるところでありました。天竜川に大水が出て瀬が代ると、田村の新田はおし流されてしまいます。大雨が降りつづき大水が出ると、村中の人が明神様でお祭りをし、神様から瀬分け鎌をいただき、大ぜいの若連中が、この鎌をもってはだかになって天竜川へとびこみ、瀬分け鎌を引くとたちまち瀬がかわって向うの方へ流れ村が

たすかりました。このあらたかな明神様と、池野氏の八幡様と合せまわることになって現在の諏訪神社のところへうつりました。―『豊丘村誌』上巻七十一頁・豊丘村誌刊行会・一九七五

田村の明神様に関係して、天竜川に大水が出て、瀬が変わると田村の新田は押し流されてしまう。そこで大雨が降り続き、大水が出ると、村中の人がお祭りをして、神様から瀬分け鎌をいただき、大勢の若者連中がこの鎌を持って天竜川に飛び込み、瀬分け鎌を引くとたちまち瀬が変わって、向こうの方へ流れるようになり、助かったのだと言うのです。

瀬分け鎌が洪水のときに水の流れを変える手段として利用されたことになります。それではこの背分け鎌とは一体どのようなものなのでしょう。それを知るために、次の伝説を見てください。

(ウ) 中郷の流れ宮 (下伊那郡上村)

中郷の分校だった所の近くに、大きな岩があって、諏訪明神を祭ったんだに。いつのことだったか、大洪水にあって流されちゃったことがあるんな。そうして、今の諏訪宮ん所まで流されちゃったもんで、それ以後、

中郷に祭ってあった明神様ん所を流れ宮っちゅうように
なったんだに。諏訪宮には、なぎがまが二本お祭りしたっ
て、上町とその付近の人たちが、御射山の祭りとして八
月二五・二六日にお祭りをするんな。

また、水害に出あった時にゃあ、祢宜様がなぎがまを
持って川へ行って、川すじをひくと、川すじがその通り
んなったんだに。わしら（古瀬良男氏・古瀬右京氏）が
若い頃に、一度やったことがあるけど、ちいっとは川
すじが変わったに。―『南信州・上村遠山谷の民俗』
三四〇頁・上村民俗誌刊行会・一九七七

この場合、明神様とは諏訪大明神のことであり、水害に
あった時には、瀬宜がなぎ鎌をもって川へ行き、川筋を引
いて川の流れを変えたというのです。ここに出てくるなぎ
鎌が瀬分け鎌と同じものであることは間違いありません。

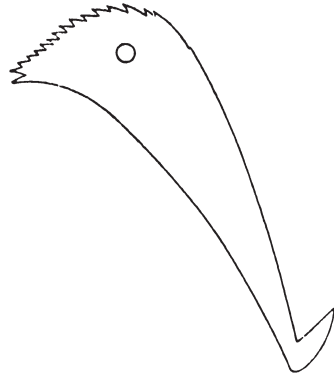
このように、瀬分け鎌、なぎ鎌が天竜川の流域では、洪
水に際して瀬を変える道具として用いられたのですが、こ
れまでの説明ではまだ実態は不明です。ところが、安政四
年（一八五七）に書かれた『諏訪旧蹟誌』という本に次の
ような内容が記されています。

信濃国はきわめて風が早いところなので、諏訪明神の
社に風の祝という者をおいて、春の初めに深く物に籠っ

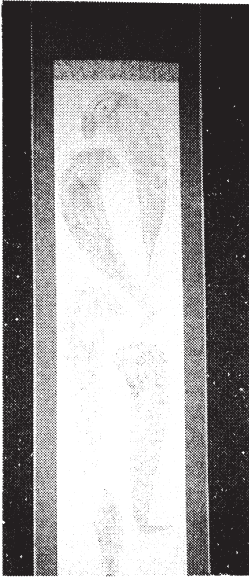
て、百日の間尊重する。そうするとその年は概して風が
静かに吹き、農業のために良い。（中略）今は風祝とい
うものはないけれども、風には関係の深い神である。ま
たこの神を祭るには鎌を神幣とする。（中略）下社から
七年ごとに一度ずつ、越後の国堺の安曇郡中土村の鎮守
の諏訪社に遣わすのは右のようなものである。長さはお
よそ一尺五寸（約四五センチ）ばかり、それに下社の祝
の姓名と年号を彫り付ける。これは大変古い例で、彼の
地の神体とする。伝え聞くのには白鳳の年号を彫ってあ
るものもあるという。また文政の末に甲斐国堺の深沢村
の土中から掘り出したこともあった。上野国（群馬県）
の山中、また甲斐国（山梨県）の西郡辺では、大風のど
き鎌を竿の先に結びつけ、家のかたわらに押し立てて風
を送るという（『復刻諏訪史料叢書』第三卷一〇四頁・
中央企画・一九八三）

また、『民間信仰辞典』で石川純一郎は「薙い鎌」を次
のように説明しています。

長い柄のついた薙い鎌。諏訪神社の春秋の遷座祭にお
いて薙い鎌を奉持する者が先頭に立つ。また、御柱祭に
伴う式に山造り役が御柱用材に薙い鎌を打ち込む神事が
ある。これは杉の木に矢を射かける矢立杉、高い木の枝



『諏訪旧蹟誌』に見えるなぎ鎌



小谷村中土の戸土神社のなぎ鎌拓本
(写真：丸山輝子氏提供)

に木鉤を投げかける鉤掛けの習俗の一つで、神意を占うものである。神に祈願をこめた上で、それを投あげ、枝にひっかかれば神意にかなったものとみなされる。難い鎌は諏訪信仰に伴う風を祈る祭式として各地に行われている。また風除けのまじないとして鎌を竿の先につけて立てたり棟にとりついたりするのをカザキリガマと称している（『民間信仰辞典』二二一頁・東京堂出版・一九八〇）。

このように、本来諏訪信仰のなかで風切りの難い鎌として用いられたものが、洪水の瀬を切る道具として用いられたのです。

以上見てきたように、前近代の人々にとっては、水害への対処は主として神や仏の力に頼るものでした。現代人の目から見ると何の根拠もない、効果も疑わしいと感ずるものかもしれませんが、当時の人々にとっては真剣な洪水対策だったのです。それも貝鞍ヶ池の新田開発に、本物の人柱でなくて墓石を沈めたことでわかるように、こうした考え方は次第に後退していったことも事実なのです。そして治水の背景に、あまり神様を意識しなくなるという日本人の意識の大転換の時期として、私は戦国時代があったので

おわりに

はないかと考えています。このことにつきましては本シリーズの『戦国時代の天龍川』をお読みください。近世になると盛んに各地に堤防が築かれ、現代の私たちの治水につながるものが数多く見られるようになります。天龍川の治水については各地方史類、土木学会編『明治以前日本土木史』（土木学会・一九三〇）などが記していますし、本シリーズでも、市川脩三『近世天龍川の治水―伊那郡松島村―』（一九八八）、下平元護『理兵衛堤防』（一九八八）、北原優美編『伊東伝兵衛と伝兵衛五井』（一九八九）、森岡忠一『ものがたり理兵衛堤防』（一九九〇）、市村威人『惣兵衛川除』（一九九一）などがあります。

これまで確認してきたように、天龍川沿いには多くの災害に関する伝説があります。災害の伝説をもつ場所は、必然的に過去に災害のあった場所であり、再び災害に見舞われる可能性を秘めています。むしろ災害の伝説が伝わっているのは、過去の人達から私達へ、そして私達の子孫へと託す、「災害に備えよ」というメッセージなのです。一人一人が伝説を大事にして、洪水などに備えるようにしていく必要があるわけです。

それにしても、伝説の世界では水害を起こすのは多くの場合、竜Ⅱ大蛇です。竜は私達の世界の住民ではなく、私達には統御できません。このことは、災害は人間の能力を越えたところにあり、神々が我々に与えているものなのだという考え方があったことを示します。それでも悪い竜は退治されます。竜の退治は人間の自然への挑戦なのです。そして人間の自然に対する挑戦は限りなく続き、現在も続いているのです。そして今の私達は、災害は防げるものであり、防ぐべきだと考えています。

大きな流れとしてはその通りであり、災害はもたらされるべきではありません。しかしながら、近代の統御されるべき自然という考え方の進展のなかに、人間は自然を完全に制御できるという思い上がりが出てきてはいないでしょうか。近年の公害問題、自然破壊の問題は、近代文明の行き着いた結果です。地球的規模で環境問題が提起されている今こそ、私達は再度、人間の力ではどうにもならない世界、竜が支配する自然といった意識を、長い間日本人が持ち続けてきたことの意味を問い直してみるべきでしょう。

現在危機に瀕している地球環境は、人間だけのためにあるものではありません。また、現在の我々だけのものでもありません。地球上の全ての生物にとっての地球であり、未来の人間、そして生物にとっても生活していくべき地球なのです。車の廃気ガス問題から始まって、我々が少し我慢することによって、他人、いや地球上の全ての生物に迷惑をかけないですむことは多々あると思います。当面我々ができることは自覚と、個人の行動です。未来にむけて各自でできるだけのことはしていかなくてはなりません。

洪水などの伝説は、いかに人間がチッポケなものを感ぜさせてくれます。たまには読者の皆さんのように天竜川の洪水の伝説などをひもといて、私達の歴史について考え

てみる必要があると思います。

付記

本書は平成二年度から四年度まで「災害多発地帯の『災害文化』に関する研究」（研究代表者・首藤伸夫）の題で公布を受けた科学研究費重点領域の分担成果の一部です。関係者の皆様に御礼を申し上げます。

笹本 正治 （ささもと しょうじ）

昭和26年12月 山梨に生まれる
信州大学人文学部卒・名古屋大学大学院博士課程前期終了
信州大学人文学部助教授（日本史学）
平成 3 年「野口賞」郷土研究部門受賞

著書 『武田氏三代と信濃－信仰と統治の狭間で－』1988, 郷土出版社
『戦国大名と職人』1988, 吉川弘文館
『戦国大名武田氏の信濃支配』1990, 名著出版
『中世の音・近世の音』1990, 名著出版
『辻の世界』1991, 名著出版

天竜川の災害伝説

平成 5 年 3 月19日 発行

企 画	建設省中部地方建設局	長野県駒ヶ根市上穂南 7－10
発 行	天竜川上流工事事務所	〒399-41 ☎0265-82-3251
著 者	笹 本 正 治	長野県松本市大村387－4 〒390-03 ☎0263-46-3744
編 集	(有)北原技術事務所	長野県南安曇郡豊科町豊科4574 〒399-82 ☎0263-72-6061
印 刷	双 葉 印 刷 (有)	長野県松本市城東 2－2－6 〒390 ☎0263-32-2263

「語りつぐ天竜川」の発刊にあたって

天竜川は独特の形態をもつ河川です。上流部は諏訪湖が洪水を調整して比較的穏やかな表情をしています。後背に多雨域をもつ三峰川・小渋川・太田切川などの支川を合流するたびに、洪水とともに大量の土砂を受け入れて一気に急流土砂河川の様相を呈し、途中多くの狭窄部の間に氾濫原を形成してきています。

一方、この氾濫原は伊那谷の穀倉地帯でもあり、地先の人々は出水ごとに濫流する天竜川との間に涙ぐましい闘いを繰り返してきました。反面、天竜川は母なる川として地域の人々の生活を支え潤してきました。田畑を灌漑し、漁獲をもたらし、山深い信州と他国を結ぶ物資の交流の場でもありました。情操のうえでも深い関わりがあり、独特の風土や文化を育んできました。伊那谷の風土は天竜川と無関係ではあり得ません。今後とも、天竜川を危険なものとして遠ざけたり、水があるからといって過度に取水したり、汚したりすることは避けねばなりません。

この天竜川を鎮め、水を高度に利用するための地元の長い営みの後を受けて、昭和12年から砂防を、昭和22年から河川を国が直轄事業として取り組むようになり、その間地域の皆様からの多大なご協力のもとに、天竜川の安全性は格段に向上しました。しかし安心は出来ません。絶えず流域の変貌をみつめ、河川施設の整備と維持管理を図っていかねばなりません。また、水害防止と利水に一応の成果をみた現在、地域にとって望ましい天竜川の姿を考え、その方向に向けて管理してゆくことがこれからの課題であると考えます。

「語りつぐ天竜川」は、天竜川の治水に関する地域の知見や経験を収集し、広く地域共有の知識とすることにより、地域の方に天竜川に対する認識を深めていただき、よりよい天竜川を築いていくことに役立ちたいと考え発行するものです。

なお、ご執筆いただく方々には、自由な立場からお考えを披瀝していただいていますので、建設省の見解とは異なる場合がありますことを付言します。

建設省中部地方建設局天竜川上流工事事務所
所 長 望 月 達 也

「語りつぐ天竜川」目録

- | | |
|-----------------------------|-------------|
| 1. 伊那谷の気象 | 米 山 啓 一 著 |
| 2. 天竜川上流域の立地と災害 | 北 澤 秋 司 著 |
| 3. 天竜川に於ける河川計画の歩み | 鈴 木 徳 行 著 |
| 4. 総合治水の思想 | 上 條 宏 之 著 |
| 5. 総合治水と森林と | 中 野 秀 章 著 |
| 6. 伊久間地先に於ける天竜川の変遷 | 松 澤 武 著 |
| 7. 天竜峡で見た天竜川水位の変遷 | 今 村 真 直 著 |
| 8. 村境は不思議だ | 平 沢 清 人 著 |
| 9. 諏訪湖の富栄養化と生物群集の変遷 | 倉 沢 秀 夫 著 |
| 10. 諏訪湖の御神渡し | 米 山 啓 一 著 |
| 11. 理兵衛堤防 | 下 平 元 護 著 |
| 12. 近世 天竜川の治水 — 伊那郡松島村 — | 市 川 脩 三 著 |
| 13. 川筋の変遷 — 天竜川と三峰川の場合 — | 唐 沢 和 雄 著 |
| 14. 伊那谷山岳部の降雨特性 | 宮 崎 敏 孝 著 |
| 15. 天竜川の橋 | 日下部新一著 |
| 16. 伊東伝兵衛と伝兵衛五井 | 北 原 優 美 編 |
| 17. 天竜川の魚や虫たち | 橋 爪 寿 門 著 |
| 18. 天竜川のホタル | 勝 野 重 美 著 |
| 19. 天竜川流域の村々 | 松 澤 武 著 |
| 20. 小洪川水系に生きる — 人と水と土と木と — | 中 村 寿 人 著 |
| 21. ものがたり 理兵衛堤防 | 森 岡 忠 一 著 |
| 22. 量地指南に見る 江戸時代中期の測量術 | 吉 澤 孝 和 著 |
| 23. 土木技術と生物工学 — 生きものを扱う技術 — | 亀 山 章 著 |
| 24. 戦国時代の天竜川 | 笹 本 正 治 著 |
| 25. 天竜川の水運 | 日下部新一著 |
| 26. 惣兵衛川除 | 市 村 咸 人 著 |
| 27. 紙芝居 開墾堤防 — 下伊那郡豊丘村伴野 — | 竹 村 浪 の 人 著 |
| 28. 昭和36年伊那谷大水害の気象 | 奥 田 穰 著 |
| 29. 天竜川の淵伝説 — 『熊谷家伝記』を中心に — | 笹 本 正 治 著 |

- | | |
|----------------------|---------------------|
| 30. 天竜川の源流地帯 | 赤 羽 篤 著 |
| 31. 東 天 竜 | 三浦孝美 共著
仁科英明 |
| 32. 天竜河原の開発と石川除 | 塩 沢 仁 治 著 |
| 33. 伊那谷は生きている | 松 島 信 幸 著
(以上既刊) |
| 34. 天竜川の災害伝説 | 笹 本 正 治 著 |
| 35. 天竜川の災害年表 | 笹 本 正 治 編 |
| 36. 天竜川水運と樽木 | 村 瀬 典 章 著 |
| 37. 水辺の環境を守る | 桜 井 善 雄 著 |
| 38. 諏訪湖 ― その氾濫の社会史 ― | 北 原 優 美 編
(発刊中) |